

# 中城御殿跡（首里高校内）

—首里高校校舎改築に伴う発掘調査—

平成29（2017）年7月

沖縄県立埋蔵文化財センター





# 序

本報告書は、沖縄県立首里高等学校の校舎改築に伴う発掘調査として、沖縄県立埋蔵文化財センターが、平成25（2013）～26（2014）年度に実施した首里高等学校内に所在する中城御殿跡の発掘調査成果をまとめたものです。

中城御殿は、次期国王となる世子の邸宅として、1621～1640年代に現在の首里高等学校敷地内に創建されました。その後、明治8（1875）年に首里大中町の旧県立博物館跡地に移転するまでの間、次期国王となる世子が執務を行い、生活した場所とされています。

中城御殿が移転した後、明治44（1911）年に沖縄県立第一中学校がこの地に建てられ、多くの子供たちが勉学に励む場となりました。その校舎は、昭和20（1945）年の沖縄戦により大きく破壊されましたが、終戦後に首里高等学校として再建され、今日まで学びの場として地域に親しまれています。

発掘調査の結果、中城御殿当時の石積みや井戸などの遺構に加え、中国をはじめとする様々な国で生産された遺物が数多く発見されました。また、中城御殿を創建する際に行った大規模な造成工事や、石積みの造り替えの痕跡から、傾斜した土地を計画的かつ効率的に利用したことが判明しています。さらに、中城御殿が創建される以前の建物の柱跡やゴミ捨て穴なども見つかっており、次期国王が居住する前から、この場所に何らかの施設があったことを伺わせています。これに加え、沖縄戦で破壊された沖縄県立第一中学校の痕跡や戦後の首里高校の基礎柱跡なども見つかると、この土地の約500年前から今日に至るまでの変遷を垣間見ることができます。

当初、記録保存を目的として進めていた発掘調査でしたが、他に類を見ない遺構や遺物の発見により、関係機関との調整を重ね、多くの遺構を現地に保存することが決まりました。様々な歴史の語り部である遺跡は、再び私達の前に姿を現すときまで、地中で大切に保管されることとなります。

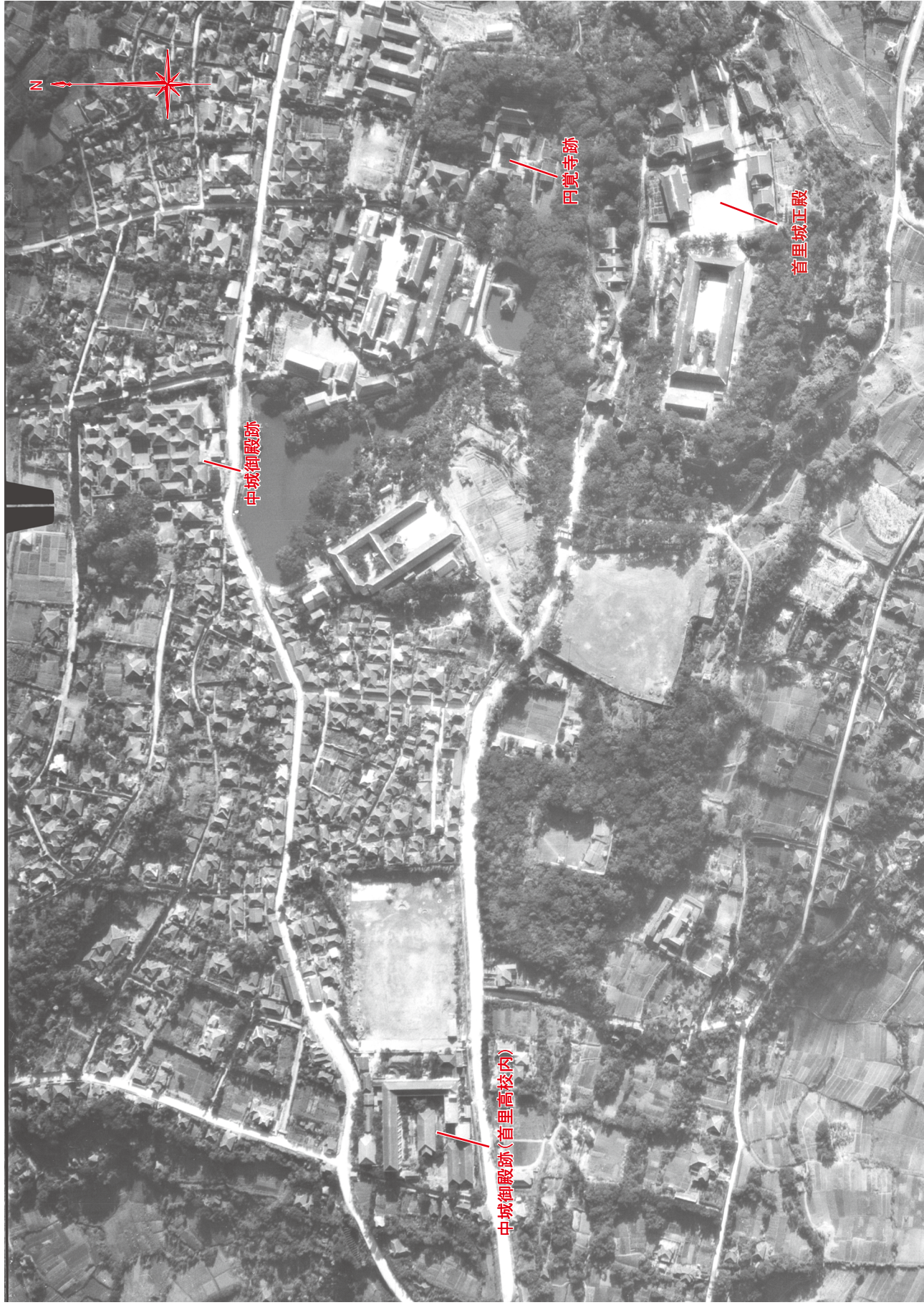
このような成果をまとめた本報告が、首里地区の歴史のみならず、沖縄県の歴史・文化を理解する資料として活用されるとともに、広く文化財の保護・活用について関心をもっていただければ幸いです。

最後に、発掘調査及び資料整理作業に際し、様々なご指導・ご助言・ご協力をいただきました関係者各位に厚く御礼申し上げます。

平成29（2017）年7月

沖縄県立埋蔵文化財センター  
所長 金城 亀信





卷頭図版1 米軍撮影航空写真(1945年撮影)(沖縄県教育庁文化財課史料編集班所蔵)





巻頭図版2 中城御殿跡航空写真





巻頭図版3 調査区遠景





卷頭図版4 水場遺構と首里高校





卷頭図版5 上：SJ3 検出状況  
下：SE1 出土遺物





卷頭図版6 SJ3 出土遺物





卷頭図版7 上：SK51 出土遺物  
下：復元資料



# 例 言

- 1 本報告書は教育庁施設課から予算令達を受け、平成25（2013）～平成26（2014）年度に沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した首里高等学校敷地内に所在する中城御殿跡の発掘調査成果をまとめたものである。
- 2 本報告書で報告する中城御殿跡は那覇市首里真和志町首里高等学校敷地内に所在する。明治8（1875）年に移転した那覇市首里大中町に所在する中城御殿と区別するため、発掘調査時や遺跡速報展の際には遺跡名称を首里高校内中城御殿跡としていたが、本報告書では本来の呼称である中城御殿跡（首里高校内）とする。
- 3 中城御殿跡の取り扱いについては、当初記録保存を目的とした調査を実施していたが、関係機関と調整を行い、一部の遺構を除き、現地に保存することとなった。
- 4 地図データは、国土地理院の電子国土webシステムから配信されたものを使用している。
- 5 本報告で使用している座標は、世界測地系の第XV系を用い、方位は座標北を用いた。
- 6 土色は、農林水産省農林水産技術会事務局監修「新版標準土色帖」2013年度版を使用した。
- 7 本書の編集は、当センター職員・委託民間組織の協力を得て、亀島慎吾が行った。執筆は下記以外を亀島が行ったが、第1章第1節は島袋洋氏、中山晋両氏の協力を得た。また、第8章第1節～第6節は下記執筆者とそれぞれ検討を行い、亀島が執筆した。

第4章 第1節第1項 SE1出土遺物…平良和輝

第4章 第2節第5項、第3節第1項・第2項

中国産青磁・白磁・青花・本土産陶磁器・中国産褐釉陶器・タイ産褐釉陶器…宮城淳一

第4章 第2節第2項・第5項、第3節第1項 玉・石製品…大堀皓平

第4章 第5節第1項…黒住耐二（千葉県立中央博物館）

第4章 第5節第2項…高宮広土（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

第5章 第1節…パリノ・サーヴェイ株式会社

- 8 添付CDには、各遺構出土の遺物・貝類遺体の集計表のExcelファイルを所収している。
- 9 引用文献は本文中に（執筆者 発表年）で示し、執筆者は適宜略称を用いた。遺物観察に用いた文献等は、巻末にまとめて掲載した。
- 10 本書に掲載された写真は、現地調査記録写真を亀島慎吾、天久朝海、本村麻里衣が撮影した。遺物写真等は亀島慎吾、天久朝海、伊藤恵美利、屋我尚子、島仲美香、赤嶺雅子が撮影した。
- 11 当初は出土層位や出土遺物全ての情報を整理し報告する計画であったが、包含層及び遺構出土遺物が膨大にあり、時間の都合上、最も遺跡の性格を表す遺構出土遺物についてのみ報告を行う。将来的には包含層出土分の遺物の整理を行い、今回の報告で不十分となった部分についても補完する予定である。
- 12 今回の調査で得られた遺物、実測図及び写真等の記録は、全て沖縄県立埋蔵文化財センターにて保管している。

# 目次

序

巻頭図版

例言

## 第1章 発掘調査に至る経緯と経過

- 第1節 調査に至る経緯と経過…………… 1
- 第2節 調査体制…………… 3

## 第2章 位置と環境

- 第1節 地理的環境…………… 5
- 第2節 歴史的環境…………… 5

## 第3章 調査方法

- 第1節 発掘調査……………11
- 第2節 層序概要……………15
- 第3節 遺構の時期区分……………15
- 第4節 層序と遺構主な遺物……………16
- 第5節 資料整理作業……………25

## 第4章 発掘調査の成果

- 第1節 近・現代の遺構・遺物……………27
  - 第1項 近・現代の遺構・遺物……………27
- 第2節 近世の遺構・遺物……………36
  - 第1項 近世1(18世紀末～中城御殿移転まで)……………36
  - 第2項 近世2(18世紀代)……………59
  - 第3項 近世2～3の遺構・遺物……………107
  - 第4項 近世3(中城御殿創建～17世紀代)……………125
  - 第5項 近世3(中城御殿創建～17世紀代)  
～グスク1の遺構・遺物……………162
- 第3節 グスク時代の遺構・遺物……………172
  - 第1項 グスク1の遺構・遺物……………172
  - 第2項 グスク2の遺構・遺物……………222

第4節 骨製品・貝製品……………224

第5節 自然遺物……………226

第1項 中城御殿跡(首里高校内)から得られた  
貝類遺体……………227

第2項 中城御殿跡(首里高校内)  
出土の植物遺体……………254

第5章 自然科学分析……………259

第1節 中城御殿跡(首里高校内)の自然科学  
分析……………259

## 第6章 遺構の現地保存

第1節 現地保存に至る経緯……………276

第2節 遺構の保護……………277

第7章 基礎資料……………290

第1節 各遺構出土遺物点数……………290

第2節 出土遺物一覧……………290

## 第8章 総括

第1節 時期区分の設定と遺物……………337

第2節 グスク時代……………341

第3節 近世……………343

第4節 近・現代……………348

第5節 遺構の現地保存……………349

第6節 総括……………349

引用・参考文献……………350

報告書抄録……………353

## 挿 図 目 次

第1図 沖縄県の位置	7	第45図 近世2の遺構出土遺物3	79
第2図 中城御殿跡(首里高校内)の 位置及び周辺の遺跡	8	第46図 近世2の遺構出土遺物4	80
第3図 首里古地図	9	第47図 近世2の遺構出土遺物5	81
第4図 グリッド設定と調査区	17	第48図 近世2の遺構出土遺物6	82
第5図 壁面①	18	第49図 近世2の遺構出土遺物7	83
第6図 壁面③	22	第50図 近世2の遺構出土遺物8	84
第7図 各遺構(近・現代)	26	第51図 近世2の遺構出土遺物9	85
第8図 近・現代の遺構1	27	第52図 近世2の遺構出土遺物10	86
第9図 近・現代の遺構2	28	第53図 近世2の遺構出土遺物11	87
第10図 近・現代の遺構3	29	第54図 近世2の遺構出土遺物12	88
第11図 近・現代の遺構4	30	第55図 近世2の遺構出土遺物13	89
第12図 近・現代の遺構5	31	第56図 近世2の遺構出土遺物14	90
第13図 近・現代の遺構出土遺物1	33	第57図 近世2の遺構出土遺物15	91
第14図 近・現代の遺構出土遺物2	34	第58図 近世2の遺構出土遺物16	92
第15図 近・現代の遺構出土遺物3	35	第59図 近世2の遺構出土遺物17	93
第16図 近世1-Aの遺構1	36	第60図 近世2の遺構出土遺物18	94
第17図 近世1-Aの遺構2	37	第61図 近世2の遺構出土遺物19	95
第18図 近世1-Aの遺構3	39	第62図 近世2の遺構出土遺物20	96
第19図 近世1-Aの遺構4	40	第63図 近世2の遺構出土遺物21	97
第20図 近世1-Aの遺構5	41	第64図 近世2の遺構出土遺物22	98
第21図 近世1-Aの遺構6	41	第65図 近世2の遺構出土遺物23	99
第22図 近世1-Aの遺構7	42	第66図 近世2の遺構出土遺物24	100
第23図 近世1-Aの遺構8	43	第67図 近世2の遺構出土遺物25	101
第24図 近世1-Aの遺構9	44	第68図 近世2の遺構出土遺物26	102
第25図 近世1-Aの遺構10	44	第69図 近世2の遺構出土遺物27	103
第26図 近世1-Bの遺構1	46	第70図 近世2の遺構出土遺物28	104
第27図 近世1-Bの遺構2	48	第71図 近世2の遺構出土遺物29	105
第28図 近世1-Bの遺構3	49	第72図 近世2の遺構出土遺物30	106
第29図 近世1-Aの遺構出土遺物1	52	第73図 近世2～3-Aの遺構1	108
第30図 近世1-Aの遺構出土遺物2	53	第74図 近世2～3-Aの遺構2	109
第31図 近世1-Aの遺構出土遺物3	54	第75図 近世2～3-Aの遺構3	111
第32図 近世1-Bの遺構出土遺物1	55	第76図 近世2～3-Aの遺構4	112
第33図 近世1-Bの遺構出土遺物2	56	第77図 近世2～3-Bの遺構1	115
第34図 各遺構(近世1、近世2、近世2～3、 近世3、近世3～グスク1)	57	第78図 近世2～3-Bの遺構2	116
第35図 近世2の遺構1	60	第79図 近世2～3-Bの遺構3	117
第36図 近世2の遺構2	61	第80図 近世2～3-Aの遺構出土遺物1	119
第37図 近世2の遺構3	63	第81図 近世2～3-Aの遺構出土遺物2	120
第38図 近世2の遺構4	64	第82図 近世2～3-Aの遺構出土遺物3	121
第39図 近世2の遺構5	65	第83図 近世2～3-Aの遺構出土遺物4	122
第40図 近世2の遺構6	66	第84図 近世2～3-Aの遺構出土遺物5	123
第41図 近世2の遺構7	67	第85図 近世2～3-Bの遺構出土遺物	124
第42図 近世2の遺構8	68	第86図 近世3の遺構1	125
第43図 近世2の遺構出土遺物1	77	第87図 近世3の遺構2	126
第44図 近世2の遺構出土遺物2	78	第88図 近世3の遺構3	129
		第89図 近世3の遺構4	131
		第90図 近世3の遺構5	132

第91図	近世3の遺構6	132	第139図	グスク1の遺構12	185
第92図	近世3の遺構7	133	第140図	グスク1の遺構13	186
第93図	近世3の遺構8	134	第141図	グスク1の遺構14	186
第94図	近世3の遺構9	135	第142図	グスク1の遺構15	187
第95図	近世3の遺構10	136	第143図	グスク1の遺構16	187
第96図	近世3の遺構11	137	第144図	グスク1の遺構17	188
第97図	近世3の遺構12	137	第145図	グスク1の遺構18	189
第98図	近世3の遺構13	138	第146図	グスク1の遺構19	190
第99図	近世3の遺構14	139	第147図	グスク1の遺構出土遺物1	200
第100図	近世3の遺構15	139	第148図	グスク1の遺構出土遺物2	201
第101図	近世3の遺構出土遺物1	145	第149図	グスク1の遺構出土遺物3	202
第102図	近世3の遺構出土遺物2	146	第150図	グスク1の遺構出土遺物4	203
第103図	近世3の遺構出土遺物3	147	第151図	グスク1の遺構出土遺物5	204
第104図	近世3の遺構出土遺物4	148	第152図	グスク1の遺構出土遺物6	205
第105図	近世3の遺構出土遺物5	149	第153図	グスク1の遺構出土遺物7	206
第106図	近世3の遺構出土遺物6	150	第154図	グスク1の遺構出土遺物8	207
第107図	近世3の遺構出土遺物7	151	第155図	グスク1の遺構出土遺物9	208
第108図	近世3の遺構出土遺物8	152	第156図	グスク1の遺構出土遺物10	209
第109図	近世3の遺構出土遺物9	153	第157図	グスク1の遺構出土遺物11	210
第110図	近世3の遺構出土遺物10	154	第158図	グスク1の遺構出土遺物12	211
第111図	近世3の遺構出土遺物11	155	第159図	グスク1の遺構出土遺物13	212
第112図	近世3の遺構出土遺物12	156	第160図	グスク1の遺構出土遺物14	213
第113図	近世3の遺構出土遺物13	157	第161図	グスク1の遺構出土遺物15	214
第114図	近世3の遺構出土遺物14	158	第162図	グスク1の遺構出土遺物16	215
第115図	近世3の遺構出土遺物15	159	第163図	グスク1の遺構出土遺物17	216
第116図	近世3の遺構出土遺物16	160	第164図	グスク1の遺構出土遺物18	217
第117図	近世3の遺構出土遺物17	161	第165図	グスク1の遺構出土遺物19	218
第118図	近世3～グスク1の遺構1	162	第166図	グスク1の遺構出土遺物20	219
第119図	近世3～グスク1の遺構2	163	第167図	グスク1の遺構出土遺物21	220
第120図	近世3～グスク1の遺構3	164	第168図	グスク1の遺構出土遺物22	221
第121図	近世3～グスク1の遺構4	165	第169図	グスク2の遺構1	222
第122図	近世3～グスク1の遺構5	166	第170図	グスク2の遺構出土遺物	222
第123図	近世3～グスク1の遺構出土遺物1	168	第171図	グスク2の遺構2	223
第124図	近世3～グスク1の遺構出土遺物2	169	第172図	骨製品・貝製品	225
第125図	近世3～グスク1の遺構出土遺物3	170	第173図	優占種の組成変化	228
第126図	近世3～グスク1の遺構出土遺物4	171	第174図	生息場所類型組成変化	229
第127図	各遺構(グスク1・グスク2)	173	第175図	近代のSM9から抽出された卵殻?	231
第128図	グスク1の遺構1	174	第176図	土壌サンプルから抽出された陸産貝類の 生息場所類型組成変化	231
第129図	グスク1の遺構2	176	第177図	土壌サンプルから抽出された陸産貝類の 種組成変化	231
第130図	グスク1の遺構3	177	第178図	中城御殿跡より回収された植物遺体	255
第131図	グスク1の遺構4	178	第179図	植物珪酸体含量	263
第132図	グスク1の遺構5	178	第180図	大型植物遺体群集組成	264
第133図	グスク1の遺構6	179	第181図	各試料の蛍光X線スペクトル(1)	269
第134図	グスク1の遺構7	180	第182図	各試料の蛍光X線スペクトル(2)	270
第135図	グスク1の遺構8	181	第183図	敷石遺構の保存方法	280
第136図	グスク1の遺構9	182	第184図	窪地にある遺構の保護方法	280
第137図	グスク1の遺構10	183			
第138図	グスク1の遺構11	184			

第185図	重複した遺構の保護方法	280	第213図	出土遺物一覧20	319
第186図	洞穴遺構の平面形態概略	281	第214図	出土遺物一覧21	320
第187図	洞穴遺構の内部形態概略	281	第215図	出土遺物一覧22	321
第188図	埋め戻し計画平面図	284	第216図	出土遺物一覧23	322
第189図	造成計画平面図	285	第217図	出土遺物一覧24	323
第190図	横断図(1)	286	第218図	出土遺物一覧25	324
第191図	横断図(2)	287	第219図	出土遺物一覧26	325
第192図	横断図(補足)	288	第220図	出土遺物一覧27	326
第193図	校舎断面図と遺構保護高さ	289	第221図	出土遺物一覧28	327
第194図	出土遺物一覧1	300	第222図	出土遺物一覧29	328
第195図	出土遺物一覧2	301	第223図	出土遺物一覧30	329
第196図	出土遺物一覧3	302	第224図	出土遺物一覧31	330
第197図	出土遺物一覧4	303	第225図	出土遺物一覧32	331
第198図	出土遺物一覧5	304	第226図	出土遺物一覧33	332
第199図	出土遺物一覧6	305	第227図	出土遺物一覧34	333
第200図	出土遺物一覧7	306	第228図	出土遺物一覧35	334
第201図	出土遺物一覧8	307	第229図	出土遺物一覧36	335
第202図	出土遺物一覧9	308	第230図	出土遺物一覧37	336
第203図	出土遺物一覧10	309	第231図	SK51主な出土遺物と割合	338
第204図	出土遺物一覧11	310	第232図	SJ3主な出土遺物	339
第205図	出土遺物一覧12	311	第233図	SJ3出土遺物割合	340
第206図	出土遺物一覧13	312	第234図	模式図	341
第207図	出土遺物一覧14	313	第235図	グスク時代	341
第208図	出土遺物一覧15	314	第236図	中世大友府内町跡出土ガラス製品	342
第209図	出土遺物一覧16	315	第237図	SK51出土のガラス製品	342
第210図	出土遺物一覧17	316	第238図	近世の遺構変遷	345
第211図	出土遺物一覧18	317	第239図	首里古地図と遺構重ね図	347
第212図	出土遺物一覧19	318	第240図	近・現代	348

## 図版目次

図版 1	調査経過1	11	図版17	近世3～グスク1の遺構	166
図版 2	調査経過2	12	図版18	グスク1の遺構1	172
図版 3	調査経過3	13	図版19	グスク1の遺構2	174
図版 4	調査経過4	14	図版20	グスク1の遺構3	175
図版 5	壁面①	18	図版21	グスク1の遺構4	177
図版 6	壁面②	21	図版22	グスク1の遺構5	178
図版 7	近世1-Aの遺構1	43	図版23	グスク1の遺構6	180
図版 8	近世1-Aの遺構2	45	図版24	グスク1の遺構7	180
図版 9	近世1-Aの遺構3	45	図版25	グスク1の遺構8	181
図版10	近世1-Bの遺構1	47	図版26	グスク1の遺構9	182
図版11	近世1-Bの遺構2	51	図版27	グスク1の遺構10	183
図版12	近世2の遺構	59	図版28	グスク1の遺構11	184
図版13	近世2～3-Bの遺構	117	図版29	グスク1の遺構12	185
図版14	近世3の遺構1	131	図版30	グスク1の遺構13	188
図版15	近世3の遺構2	134	図版31	グスク1の遺構14	190
図版16	近世3の遺構3	136	図版32	グスク1の遺構15	191

図版33	ガラス玉	192
図版34	貝類遺体 巻貝1	247
図版35	貝類遺体 巻貝2	248
図版36	貝類遺体 巻貝3	249
図版37	貝類遺体 巻貝4	250
図版38	貝類遺体 巻貝5	251
図版39	貝類遺体 二枚貝1	252

図版40	貝類遺体 二枚貝2	253
図版41	花粉化石・寄生虫卵・微粒炭・ 珪化組織片	273
図版42	大型植物遺体	274
図版43	ガラス製品および陶器試料	275
図版44	遺構保護経過1	282
図版45	遺構保護経過2	283

## 挿表目次

第1表	中城御殿跡 関連年表	10
第2表	遺構記号凡例	13
第3表	層序一覧	16
第4表	近・現代 出土遺物観察一覧	31
第5表	近世1-A 出土遺物観察一覧	51
第6表	近世1-B 出土遺物観察一覧	55
第7表	近世2 出土遺物観察一覧	69
第8表	近世2~3-A 出土遺物観察一覧	118
第9表	近世2~3-B 出土遺物観察一覧	123
第10表	近世3 出土遺物観察一覧	140
第11表	近世3~グスク1 出土遺物観察一覧	167
第12表	SK56ガラス玉集計表	192
第13表	グスク1 出土遺物観察一覧	193
第14表	骨製品・貝製品 出土遺物観察一覧	224
第15表	貝類の生息場所類型	226
第16表	土壌サンプル分析遺構や主な遺構等の 優占種の同定標本数(NISP)	228
第17表	土壌サンプルから得られた貝類遺体等 の組成	232
第18表	貝類出土状況 巻貝	239
第19表	貝類出土状況 二枚貝・頭足綱・ウニ綱出土表	243
第20表	土壌をサンプリングした遺構、それらの用途 および年代(発掘担当者による見解)	254

第21表	SK22より検出された植物遺体	256
第22表	SK51より検出された植物遺体	256
第23表	SA9, 12, 13より検出された植物遺体	256
第24表	SX14より検出された植物遺体	256
第25表	中城御殿跡出土の植物遺体(まとめ)	256
第26表	アワのサイズ	258
第27表	放射線炭素年代測定結果	262
第28表	暦年較正結果	262
第29表	花粉分析・寄生虫卵分析結果	263
第30表	植物珪酸体含量	263
第31表	微細物分析結果	264
第32表	主な種実遺体の計測値	265
第33表	土壌理化学分析結果	265
第34表	ガラス製品および陶器(青色顔料)の 試料一覧	267
第35表	測定条件	268
第36表	蛍光X線分析結果(化学組成)	271
第37表	遺跡保護埋戻し事例1	278
第38表	遺構保護埋戻し事例2	279
第39表	各遺構出土遺物点数表	291
第40表	ガラス製品の判定量分析結果	343
第41表	中城御殿跡(首里高校内)SK51出土の ガラス製品 蛍光X線分析結果(化学組成)	343

### <付属CD所収データ一覧>

第18表	貝類出土状況 巻貝
第19表	貝類出土状況 二枚貝・頭足綱・ウニ綱出土表
第42表	各遺構出土状況
第43表	SA出土状況
第44表	SD出土状況
第45表	SE出土状況
第46表	SG出土状況
第47表	SJ出土状況
第48表	SK出土状況

第49表	SL出土状況
第50表	SM出土状況
第51表	SP出土状況
第52表	SQ出土状況
第53表	SR出土状況
第54表	SS出土状況
第55表	SX出土状況
第56表	水場遺構出土状況
第57表	階段状遺構出土状況
第58表	骨製品・貝製品出土状況

## 第1章 発掘調査に至る経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯と経過

**埋蔵文化財事前審査願** 平成22年度に沖縄県立首里高等学校（以下、首里高校）の現校舎の老朽化に伴い、耐震化を図る必要性が生じたため、グラウンド部分に新校舎を改築することが決定した。事業者である沖縄県は那覇市教育委員会文化財課（以下、那覇市文化財課）に、「埋蔵文化財事前審査願」を平成22年10月7日付で提出した。これを受けた那覇市文化財課は平成22年11月5日付で沖縄県に対し、「現況不明」とし、今後調整が必要と回答した。

**試掘調査と初期の調整** 那覇市文化財課は、平成23年8月1日から試掘調査を実施し、遺物包含層と遺構を確認した。那覇市文化財課から試掘調査結果の報告を受けた沖縄県教育庁文化財課（以下、県文化財課）は、8月30日に現地視察し、8月31日には県文化財課、沖縄県教育庁施設課（以下、県施設課）、沖縄県土木建築部施設建築課（以下、県施設建築課）による合同現場調整が行われた。9月9日に現地の首里高校グラウンドにて県文化財課、那覇市文化財課、受注業者である国吉設計、国吉組による話し合いがもたれた。9月21日には県施設建築課、県施設課、県文化財課、国吉設計の集った調整会議において、継続して実施される発掘調査に要する経費は原因者である県施設課が負担することになった。なお、グラウンド北側の沈砂池予定地の発掘調査方法及びグラウンド南側の試掘調査は、現石積みに近すぎると、石積み倒壊の恐れがあることから、掘り下げ対象は約2.5m以上離れた場所にすることとなった。さらに、グラウンド北側の普通教室棟改築予定地の発掘調査については、平成24年度以降に実施することが決定した。

**工事中止** 校舎改築予定地内の埋蔵文化財の広がりを確認するため、平成23年12月8日までの間、那覇市文化財課が試掘・確認調査を断続的に実施した。その結果、グラウンド全域に遺物及び遺構が確認されたため、工事は中止されることとなった。試掘・確認調査を実施した那覇市文化財課は、本発掘調査を要すると県文化財課に報告し、平成24年3月27日に調査結果をまとめた報告書を提出した。

**中城御殿跡の確認** 平成24年2月から3月にかけて、県文化財課立ち会いのもと、校舎改築予定地内のグラウンド部分の造成土を掘削したところ、遺構の保存状態が良いことが確認された。遺構の平面測量を実施した上で、発見された石積み遺構と1700年代に描かれたとされる「首里古地図」を重ね合わせる作業などを行い、当該地が17世紀前半に創建された中城御殿跡である可能性が非常に高いことが判明した。

**工事中断と不発弾の発見** 平成24年3月には校舎改築工事の契約が終了し、工事継続困難と判断された。ここまでの間、不発弾が17発発見され、今後の発掘調査や改築工事に伴い、新たに不発弾が発見される可能性が指摘された。

**調査実施主体の決定** この間、那覇市文化財課、県施設課と埋蔵文化財の取り扱いについて協議し、県文化財課が実施主体となり発掘調査を実施することとなった。これを受け、平成24年1月20日に県文化財課から沖縄県立埋蔵文化財センター（以下、埋蔵文化財センター）へ発掘調査実施の打診があり、発掘調査に伴う必要経費の算出や現地確認などを行うこととなった。

**説明会** 平成24年度には、首里高校関係者への工事中止説明会や首里高校保護者説明会を実施した。そのような状況の中、首里高校校舎改築の早期実現を求める要請が首里高校PTA会長、養秀同窓会会長、元首里高校校長会雄志の会会長連名で、平成24年11月19日付で沖縄県教育長あてに「首里高校校舎改築の早期実現を求める要請」が提出された。

**南側石積みの写真測量** 平成25年2月14日から平成25年3月29日の間、沖縄県教育庁文化財課は、発掘調査に先立ち、南側石積みのトレンチ掘削及び石積みの写真測量作業を実施した。

**本調査の概要** 平成25年6月28日、埋蔵文化財センターと株式会社アーキジオパシフィック支店は平成25年6月28日から平成27年3月31日までの2年度にわたる「首里高校内中城御殿跡発掘調査に伴う支援業務委託」契約を締結した。平成25年7月29日から平成27年2月27日までの約19か月間、現地での発掘調査を実施した。調査の結果、多くの石積み遺構や井戸、ゴミ捨て場跡、敷地造成の痕跡がみられたことから、当該地が中城御殿跡であることが判明した。加えて中城御殿が創建される以前にも当該地で生活した人々がいたことが判明した。

**文化財保護法に基づく手続き** 調査開始後には文化財保護法第99条の規定により、県文化財課へ着手報告を行った。（平成25年8月2日付け埋文第389-2号、平成26年4月11日付け埋文第33-2号）調査終了後には終了報告を行った（平成26年3月28日付け埋文第793-2号、平成27年3月5日付け埋文第714号）。なお、事務手続きの不備により文化財保護法第94条に基づく埋蔵文化財発掘通知が提出されていないことが判明した。これを受け、県文化財課、県施設課、那覇市文化財課で調整を進め、平成27年3月11日付け教施第1788号により、沖縄県知事から那覇市教育委員会経由で沖縄県教育委員会へ埋蔵文化財発掘調査の通知が提出された（進達文書は、平成27年3月16日付け那市文財第424号）。発掘調査により発見された遺物については、文化財保護法第100条2に基づき、平成27年3月19日に那覇警察署長宛に埋蔵文化財発見通知を提出し、平成27年3月25日に拾得物預かり書の送付を受けた。

**現地保存** 発掘調査の際に出土した各種遺構は、その歴史的価値や保存状態の良さから、現地保存に至った。現地保存に至る経緯や保存方法については第6章にて述べる。

**普及活動** 発掘調査期間中、一般県民を対象とした現地説明会を平成25・26年度に各1回ずつ実施した。また、首里高校社会科の授業の一環として在学生を対象とした現地説明会を随時実施するとともに、首里高校関係者を対象とした現地説明会を行った。調査の進捗に伴い、考古学を専門とする研究者や県内及び県外の埋蔵文化財に携わる職員とともに現地確認を行い、埋蔵文化財の評価を行った。

**資料整理作業** 平成27年度は発掘調査によって得られた遺物や図面などの基礎整理作業を実施するため、株式会社アーキジオパシフィック支店と「平成27年度 首里高校内中城御殿跡発掘調査に伴う資料整理支援業務委託」契約を締結し、平成27年7月16日から平成28年3月31日の間、出土遺物の洗浄及び注記作業を実施した。

平成28年度は発掘調査報告書を刊行するための資料整理作業を行った。整理作業を行うにあたり、株式会社アーキジオパシフィック支店と「首里高校内中城御殿跡発掘調査に伴う資料整理支援業務委託」契約を締結した。平成28年4月12日から平成29年3月31日の間、報告書刊行を行うための整理作業を実施した。

**発掘調査報告書の刊行** 平成29年3月8日に、有限会社ダイヤプリントと「中城御殿跡（首里高校内）に伴う発掘調査報告書印刷製本業務」契約を締結し、平成29年3月28日及び同年6月27日に、計2回の契約期間延長の改定契約を締結し、平成29年7月31日に発掘調査報告書を刊行した。



## 第2節 調査体制

本報告の中城御殿跡の発掘調査は、平成25・26年度に現地での発掘作業、平成25～28年度にかけて資料整理作業及び報告書作成を実施した。なお、発掘調査及び資料整理作業は民間調査組織の支援業務委託を導入した。平成27年度には、発掘調査で確認した遺構の保護作業を実施した。実施体制は以下のとおりである。

**事業形態** 沖縄県教育庁施設課令達事業

**事業期間** 平成25（2013）～平成28（2016）年度  
 発掘調査 平成25～26年度  
 資料整理 平成25～28年度  
 報告書作成 平成28年度

**事業主体** 沖縄県教育委員会  
**教育長** 諸見里明（平成25～27年度）、平敷昭人（平成28年度）

**事業所管** 沖縄県教育庁文化財課  
**課長** 新垣悦男（平成25年度）、嘉数卓（平成26年度）、萩尾俊章（平成27～28年度）  
**記念物班長** 盛本勲（平成25年度）、金城亀信（平成26～27年度）、上地博（平成28年度）  
**担当** 長嶺均（主任専門員：平成25～26年度）、中山晋（主任専門員：平成27～28年度）、神村智子（指導主事：平成28年度）

**事業実施** 沖縄県立埋蔵文化財センター  
**所長** 下地英輝（平成25～27年度）、金城亀信（平成28年度）  
**副参事** 島袋洋（平成25～26年度）、盛本勲（平成27年度）、濱口寿夫（平成28年度）  
**総務班長** 新垣勝弘（平成25～27年度）、比嘉智博（平成28年度）  
**担当** 平良広海（主任：平成25年度）、比嘉睦（主任：平成26年度、主査：平成27～28年度）  
**調査班長** 金城亀信（平成25年度）、盛本勲（平成26年度）、上地博（平成27年度）、仲座久宜（平成28年度）  
**担当** 羽方誠（主任専門員：平成25～27年度）、亀島慎吾（専門員：平成25～27年度、主任：平成28年度）、瀬戸哲也（主任専門員：平成28年度）

### 文化財調査嘱託員（平成25～27年度）

赤嶺志乃、新垣有一郎、井上奈々、大屋匡史、翁長圭乃子、幸地千明、新屋敷小春、杉山千曜、玉城綾、玉城美香、徳嶺里江、仲程勝哉、仲嶺真太、波照間紗希、比嘉優子、保久盛陽、眞謝太地、宮城瑠美子、宮里知恵、

### 史跡・埋蔵文化財調査員（平成28年度）

大屋匡史、仲嶺真太、外間裕一、松堂正偉、久場大暉、平良和輝

### 埋蔵文化財資料整理嘱託員（平成25～27年度）

安里綾子、伊藝由希、上原園子、嘉数渚、喜屋武朋子、久貝祐子、具志みどり、幸地麻美、島袋久美子、下地麻利恵、高安那津季、仲西三千代、玉寄智恵子、照屋麻美、仲里千秋、仲間文香、並里千佳、比嘉紗恵理、譜久村泰子、又吉利文、嶺井幸恵、宮里美也子、宮城初枝、屋我尚子、

矢舟章浩、山城美奈、山城由紀子

#### 埋蔵文化財資料整理員（平成28年度）

池宮城聡子、伊集左季、嘉数渚、下地勝恵、城間彩香、知名雪美、手嶋永子、當間郁子、渡慶次学、仲松安花奈、花城咲子、比屋根沙耶香、平安百合子、外間太一郎、嶺井多津美、宮城綾子、宮城かの子、領家範夫

#### 資料整理作業員（平成25～27年度）

有光綾子、翁長洋子、城間彩香、根岸敦子、比屋根沙耶香、平安百合子、吉村清香

#### 非常勤職員（事務補助）（平成28年度）

古見晶子、山城光子

#### 業務委託関係

「首里高校内中城御殿跡発掘調査に伴う支援業務委託」

発掘調査 株式会社アーキジオパシフィック支店

天久朝海（主任調査員：平成25～26年度）、本村麻里衣（調査員：平成25～26年度）

「平成27年度 首里高校内中城御殿跡発掘調査に伴う資料整理支援業務委託」

資料整理 株式会社アーキジオパシフィック支店

天久朝海（主任調査員：平成27年度）

「首里高校内中城御殿跡発掘調査に伴う資料整理支援業務委託（その1）」

資料整理 株式会社アーキジオパシフィック支店

天久朝海（主任調査員：平成28年度）

「平成27年度首里高校内中城御殿跡発掘調査に伴う遺跡保護ならびに埋め戻し設計業務委託」

遺構保護設計 株式会社 大洋土木コンサルタント

玉城潤二（管理技術者：平成27年度）、岡本祥宏（設計担当技術者：平成27年度）

「首里高校内中城御殿跡発掘調査に伴う遺構保護業務委託」

遺構保護 株式会社 金秀グリーン

中山真（現場代理人：平成27年度）

#### 発掘調査・資料整理協力者・協力機関（所属等は当時のもの）

沖縄県立首里高等学校 中村孝夫（校長：平成25～27年度）、安富祖英紀（事務長：平成25年度）

亘保ツル子（事務長：平成26～27年度）

那覇市教育委員会 樋口麻子、知念政樹

教育庁施設課 伊藤隆和（主幹：平成25～26年度）、上原秀光（主査：平成27～28年度）

沖縄県立埋蔵文化財センター 大屋匡史、平良和輝、眞謝太地

矢島律子（町田市立博物館）、大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館）、黒住耐二（千葉県立中央博物館）、丸山真史（東海大学）、池田榮史（琉球大学）、後藤雅彦（琉球大学）、當眞嗣一（元沖縄県立博物館館長）、福島駿介（琉球大学名誉教授）、上原静（沖縄国際大学）、栗野慎一郎（浦添市教育委員会）

天久朝海、新川睦、又吉純子、平良貴子、赤嶺雅子、仲西三千代、伊藤恵美利、新垣利津代、瑞慶覧尚美、島仲美香、屋我尚子（株式会社アーキジオパシフィック支店）、仲島保（国吉設計）

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

中城御殿跡は、次の琉球国王となる世子が暮らした邸宅跡である。名称の由来は、王子が王世子（王位継承者）になると、領地として中城間切（現在の中城村、北中城村）及び知行を下賜され、中城王子あるいは中城御殿と称されたことによる。中城御殿跡は1621～1640年、17世紀前半に王府の別邸である大美御殿の西側、現首里高等学校敷地内（首里真和志町）に創建された。その後、中城御殿は明治3（1870）年に旧県立博物館跡地（首里大中町）に移転することが決まる。ここでは、今回の調査対象となる移転する以前の中城御殿跡について記す。

**中城御殿跡の位置** 中城御殿跡は、沖縄本島南部の那覇市首里真和志町2丁目に所在し、標高約90～100mの台地縁辺部及び斜面地に位置する。

**基盤層** この基盤を構成しているのは、地質時代の第四紀更新世（180-160万年前～1万年前）に区分される琉球石灰岩で、遺跡全体に広がり確認できた。下位には、鮮新世（500万年前～160万年前）から中新世（2,300万年前～500万年前）に区分される島尻層群が堆積している。表層を成す琉球石灰岩は透水性が高く、そこに浸透した雨水は、不透水層である島尻層のクチャ（泥岩・砂岩）の面でとめられ、両者の境界から湧き出すこととなる。中城御殿跡でも、井戸や水を溜めるための遺構が発見された。どちらもクチャまで掘り込まれ、現在でも水が湧き出すほど豊富な水量を誇っている。

**中城御殿からの景観** 中城御殿跡は、首里城や移転後の中城御殿跡の所在する場所に比べわずかに標高が低い位置に所在している。当遺跡が盛行していた時期には、ここから首里城を見上げるような場所だったことが想定される。

### 第2節 歴史的環境

中城御殿跡は、次期国王の世子殿として、尚豊王代（在位1621～1640年）に綾門大道の北側に創建された。1700年代に描かれたとされる「首里古地図」をみると、東側には大美御殿、北側には金武按司の屋敷が描かれている。大美御殿は王府の別邸として1548年に創建され、王家の冠婚葬祭などの行事を行う場所でもあった。金武按司は1526年に首里に移転した（金武町誌編纂委員 1983）とされている。大美御殿の東側には浦添按司に関する場所が描かれ、その北側には美里御殿、かち木植所がそれぞれ描かれている。美里御殿（みさとうどうん）は、尚穆王の五男・尚恪、美里王子朝規（1770年-1846年）を元祖とするとされていることから、1770年以降に美里御殿が所在することが想定されるが、中城御殿跡周辺は、首里古地図では、寺関係や王府関係の屋敷は詳細に描かれるが、各按司の土地については、詳細に描かれていない。

**創建時期** 中城御殿は、1621～1640年代に創建されたとされていることから、大美御殿や金武按司などの敷地の間に創建されたことになる。創建される以前の当該地の敷地については、文献史料などにも残されていないため、その前身となるものについては判然としない状況がある。

**中城御殿の拡張** そのような中、「(省略) 寛永中尚豊第二子、佐敷王子尚文の為に營建されたもので、当時は規模それほど大ではなかったと見えて、延宝（康熙十六年）（1677年）五月の例寄に、「中城御殿狭有之候間、玉城御殿・豊見城御屋敷相済候様被追仰付候こと」とある。玉城・豊見城両家の屋敷を繰り入れて取り広げた意味である。…」(東恩納寛惇1950年「中城殿」『南島風土記』:再録 東恩納寛惇全集⑦238-240頁13-15行)の項目に記載がある。このことから、中城御殿が創建された当初は、大美御殿や金武按司の屋敷のみならず、玉城・豊見城両家の屋敷に隣接していたことが想定される。その後、中城御殿の敷地を玉城・豊見城両家の屋敷地を取り入れる形で拡張したことが伺える。発掘調査の結果でも幾度かの造成を繰り返し、屋敷の敷地を拡張している様子が確認されている。遺跡の堆積状況から、南から北へと拡張している様子がうかがえることから、北側部分に両家の屋敷地があっ

た可能性が高いが、それを示す遺構の確認は現在では困難な状況である。

**首里古地図** 首里古地図の情報から読み取ると、描かれた当時の中城御殿は、四方を石積みに囲まれ、屋敷内に南北を区分するような形で東西に石積みが描かれている。この石積みには2か所石積みが途切れている部分があり、一か所は道が描かれ、もう一か所は何も描かれていない。

**屋敷配置** 屋敷の外への出入り口は北側に1か所、南側に1か所描かれている。北側は石積みが途切れている表現のみだが、南側は入口を引き込むような形で石積みが描かれ、東側に門の屋根のようなものが描かれている。このことから、中城御殿跡の中心に入るための入口は南側にあったと考えられる。その門をくぐると、一つの建物があり、それを超えると御庭（うなー）のような広場があり北側及び南側に建物が描かれている。広場の東側には建物が描かれ、階段のようなものが描かれていることから、まわりよりも高い場所に建物があったことが想定される。このことから、基壇があったことやこの部分が屋敷の中心部で正殿であったことが考えられる。この屋敷配置は首里城の御庭や北殿、南殿、正殿の立地とよく類似している。

**屋敷入口** 入口について注目すると、隣接する大美御殿と比べ、入口までの引き込み道が長く描かれる。これは高低差があり、それをスロープ状に引き込んでいることが想定される。

**中城御殿の移転** 前述したように中城御殿に関する文献史料は残されていない状況がある。明治1（1868）年に尚泰王の王子である尚典の立太子に伴い、龍潭北側に位置する大村按司、摩文仁按司、川平親方、小禄親雲上らの宅地を合わせた敷地に移転することが取り決められた。この場所の選定理由については、1868年に久米村の地理師である与儀親雲上ら3人を中国福州に派遣して風水を学ばせ、建物の配置が行われたとされている（球陽2206号 球陽研究会編1974）。選定立地から設計・施工までが計画的に行われたとされていることから、中城御殿の移転する理由のひとつとして、風水的な屋敷の立地は大きく関わっていたことが想定される。明治8（1875年）の移転後の当該地は薬草園になり、その後、国学が置かれたとされる。

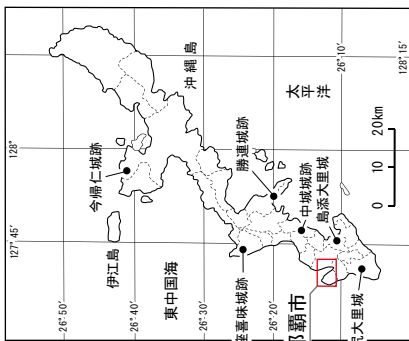
**移転後の土地利用** 中城御殿の移転の際には、使用できる資材などを移転地に搬入したことが想定される。発掘調査においても、屋敷を区画するような石積み遺構は数多く発見されたが、屋敷の柱などを支える礎石などについては一部を除き、確認することが出来なかった。礎石の割れた破片石材は多く見られたが、屋敷配置を示す遺構として原位置を保っているものはなく、屋敷の規模や広がりやを想定することは非常に困難である。

このような資材を移転先に持ち込んだと考えられるが、移転後も当該地が薬園や学校の前庭として、何らかの形で人が生活等を行う場所として使用され続けることや、一部では沖縄県立第一中学校などの遺構が、中城御殿の石積みに組み合わせる形で検出される部分も存在する。以上のことから、資材などは移転時に全て搬出されたわけではなく、一部の資材は残存しており、その後も使い続けられたと考えられる。



第1図 沖縄県の位置





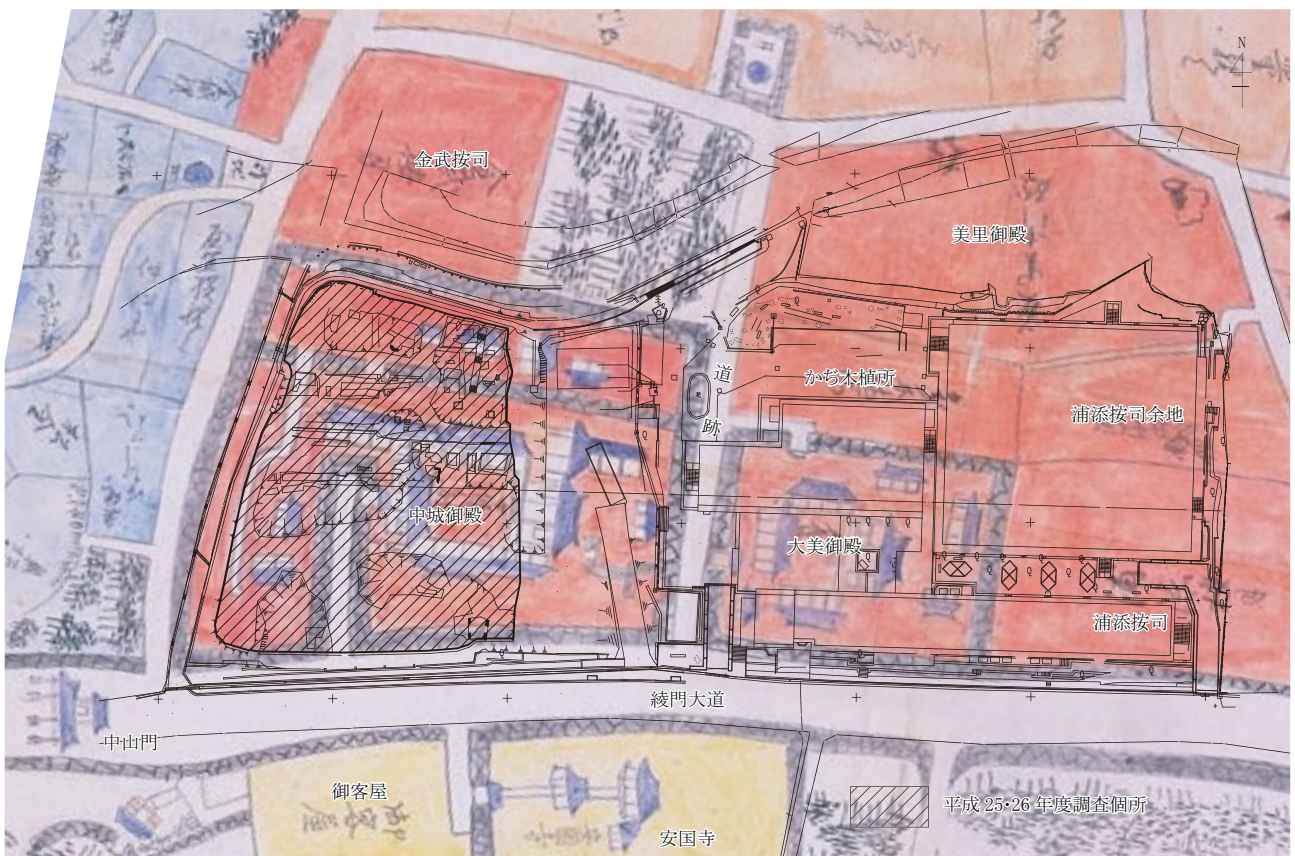
- 1 中城御殿跡(首里高校内)
- 2 首里城跡
  - 3 崎山御殿跡
  - 4 魚下原遺跡
  - 5 玉袋南面御殿遺跡
  - 6 中城御殿跡
  - 7 天界寺跡
  - 8 龍潭
  - 9 ハンタン山
  - 10 御用工所跡
  - 11 門庭寺跡
  - 12 綾門大道跡
  - 13 玉袋
  - 14 菩提院金輪殿跡
  - 15 首里西森遺物散布地
  - 16 シーゴ城遺跡
  - 17 識名遺跡
  - 18 石田遺跡
  - 19 石田ノスク
  - 20 新高古宮群南地区
  - 21 ヒヤシュー一毛遺跡
  - 22 新高原南遺跡
  - 23 新高原遺跡
  - 24 安藤東原遺跡
  - 25 安藤東原南遺跡
  - 26 安藤南東原遺跡
  - 27 新高直線原遺跡
  - 28 新高直線原北遺跡
  - 29 新高直線原南遺跡
  - 30 王ノノスク
  - 31 泉元寺跡
  - 32 牧志御願東方遺跡
  - 33 勇田古窯跡
  - 34 ハナノスク(波上宮)
  - 35 渡池村跡
  - 36 御物ノスク
  - 37 三重ノスク
  - 38 屋良森森ノスク
  - 39 ガンペビヤ丘屋遺跡
  - 40 カニヤン御殿遺物散布地
  - 41 尻山原遺跡
  - 42 豊見城跡
  - 43 豊見城ノスク
  - 44 長瀬ノスク
  - 45 ケーパノスク(仲田ノスク)
  - 46 鎌倉山ノスク(一遺跡)
  - 47 宮平ノスク(一遺跡)
  - 48 宮平遺跡
  - 49 浦添城跡

第2図 中城御殿跡(首里高校内)の位置及び周辺の遺跡(濃いトーンは概ね近世の海岸線 新島2005参考)





首里古地図 (1910年 具志氏模写図 沖縄県立図書館所蔵)



首里古地図と現在の首里高校校舎重ね図 (1910年 具志氏模写図 沖縄県立図書館所蔵)

第3図 首里古地図

第1表 中城御殿跡 関連年表

西 暦	元 号	事 項
1621～40年	尚豊王代	尚豊王代 中城御殿が現県立首里高校の地に建設される
1798年	尚温4/寛政10年	中城御殿内に公学校（国学）を開く
1801年	尚温7/享和1年	国学が龍潭近くに移転する
1808年	尚灑5/文化5年	王子邸にて冊封使に「料理馳走躍」が出される
1864年	尚泰17/元治1年	尚典（のちの中城王子）が生まれる
1866年	尚泰19/慶応2年	尚泰王が冊封をうける
1868年	尚泰21/明治1年	尚典が尚泰王の世子となる 久米村の与儀親雲上ら3人を福州に派遣 風水を学ばせ中城御殿の風水看を行う
1870年	尚泰23/明治3年	中城御殿が龍潭北側に新しく造営されることが決まる
1872年	尚泰25/明治5年	琉球藩設置
1872年	尚泰25/明治5年	久場川薬園を廃除し、中城旧殿の宅内にて改めて薬園を開き、栽培を行う 按司奉行や親方奉行をこの役所に配置
1874年	尚泰27/明治7年	中城御殿竣工
1875年	尚泰28/明治8年	中城王子尚典公新築した屋敷に移る
1879年	尚泰32/明治12年	3月 廃藩置県 首里城を明け渡し尚泰王以下中城御殿に移る 廃藩置県に伴い、国学は県庁の所管となる
1880年	明治13年	東京師範学校から教員を招聘し、教則の認可を受け、首里中学校と改称
1885年	明治18年	5月 尚泰・尚典ともに上京し東京麹町に屋敷を賜り華族となる
1887年	明治20年	沖縄県尋常中学校と改称
1899年	明治32年	沖縄県立中学校と改称
1901年	明治34年	尚泰逝去し玉陵に葬られる
1906年	明治39年	尚典帰郷し中城御殿で暮らす
1911年	明治44年	沖縄県立中学校分校が独立し沖縄県立第二中学校と称したのに伴い、沖縄県立中学校は沖縄県立第一中学校と改称
1921年	大正10年	東宮殿下（のちの昭和天皇）来訪にあたり事前に大広間が洋間に改装される 3月4日 東宮殿下が来県し中城御殿を訪問する
1923年	大正12年	鎌倉芳太郎が中城御殿にあった多くの美術品を調査する
1934年	昭和9年	田邊泰（工学博士・古建築）が来訪する
1939年	昭和14年	日本民藝協会の柳宗悦・坂元万七らが来訪する
1944年	昭和19年	第32軍司令部参謀の長野英夫少佐が御殿の一室を宿泊所として使用する 10月10日 米軍による空襲により旧那覇市の9割が焼失する（十・十空襲）
1945年	昭和20年	3月下旬 中城御殿の宝物を3つの大金庫へ移す 4月6日頃 中城御殿が米軍の砲撃をあびて炎上する 4月8日頃 火災をのがれた御後絵（肖像画）を御嶽岩のうしろに移す 4月10日頃 日本軍が上之御殿や防空壕などを機関銃陣地にする 首里の町並みとともに沖縄第一中学校も沖縄戦により壊滅する 戦後 一時引き揚げ者のバラックが建つ
1946年	昭和21年	糸満高等学校首里分校として発足 首里高等学校として独立
1950年	昭和25年	1月 首里市役所が中城御殿跡に移転する 7月 首里市営バスが営業所を同敷地内に設置する（1966年まで）
1965年	昭和40年	琉球政府が敷地を購入する（面積：11,246㎡、金額：\$195,751） 6月 米国民政府の援助により鉄筋コンクリート建の博物館新館建設を起工
1966年	昭和41年	首里支所が当蔵に移転 首里バス（1951年に民営化）が当蔵へ移転する 10月6日 博物館新館落成 11月3日 龍潭池畔にあった琉球政府立博物館が移転・開館する
1972年	昭和47年	5月15日 日本復帰にともない「沖縄県立博物館」と改称する
1980年	昭和55年	創立100周年に際し校舎を改築し、現在に至る
2006年	平成18年	3月 沖縄県立博物館が那覇市おもろまちの新館へ移転するため休館する
2007年	平成19年	沖縄県立埋蔵文化財センターによる遺構確認調査が開始される
2011～12年	平成23～24年	那覇市教育委員会（試掘）、県教育庁文化財課（造成土掘削、測量）
2012年	平成24年	遺構の現地保存が決定する
2013年	平成25年	7月 沖縄県立埋蔵文化財センターによる本調査開始

中城御殿跡（旧県立博物館跡地） 関連事項  
 中城御殿跡（首里高校敷地内） 関連事項



## 第3章 調査方法

### 第1節 発掘調査

今回の発掘調査は、平成25年7月末から平成27年2月までの述べ19か月の期間内で約5,300㎡の面積で発掘調査を実施した。当初記録保存調査を目的として調査を実施しており、限られた時間内ということもあり、必要とする情報を最低限把握するための調査方法を選択した。調整の結果、検出した遺構はほとんどが地下で現地保存することとなっている。後述するが遺構の現地保存の際の設計図に記載されている遺構が現地保存している遺構である。

**グリッド設定** グリッド設定は、中城御殿跡の遺構の中で、石積みなどは東西南北を基準に形成されていることが判明したことから、1グリッド10M×10Mを東西南北に合わせて設定した。グリッド名については、将来的に東側（校舎側）へ調査を行っていくことから、再北西の部分を起点として東側のラインについては、数字の1～10、南側のラインにはアルファベットのA～L・Mを設定した。そして、ラインが重なる部分の北西部分をグリッド名とし、A-1グリッド、A-2グリッド・・・としている。また、遺構の配置状況や検出面の状況から、北西部をⅠ区とし、Ⅶ区までの地区設定を行った。（第4図）

**遺物の取り上げ** 調査時の遺物の取り上げはグリッド名、地区名を付与して取り上げたが、遺構出土の遺物については、遺構名で遺物の取り上げを行った。

**文献情報** 今回の発掘調査では、中城御殿跡に関する文献情報が首里古地図のみで断片的であった。そのため、検出された遺構は、首里古地図と照らし合わせながら、確認する作業を行った。

**試掘結果** 那覇市教育委員会の実施した試掘調査の結果から、遺構の残存状況が非常に良いことに加え、近世期の堆積土が厚く堆積しており、何枚かに分層できることが判明していた。また、近世の中城御殿があった時期よりも古いグスク時代の層が確認されていた。上記の結果を踏まえ、近世の中でもいくつかの時期が存在する可能性があること、近世とグスク時代の2時期の遺構が存在することを仮定して発掘調査を進めた。

**調査着手** 発掘調査は、グラウンド造成土を除去した状態から着手したため、除草作業を行いながら調査着手前状況の把握を行った。（図版1-①、②）その際、造成土除去を委託した株式会社EACの測量図を基に、遺構の確認及び新規確認遺構に遺構名を付与した。

**層序付与方法の策定** 記録作業が完了した後は、Ⅴ区の部分の作業を開始した。当地区を調査している際に、近世の遺物が混入する層がいくつも検出され、ほぼ同じ時期の層が何枚も堆積している状況が判明した。このことがあり、層序名を付与する方法を策定した。

また、不発弾の回収や攪乱部分で大きく掘削された部分を利用して、基本層序の把握を行った。

この時に多くの層があるが、いくつか遺構面と考えられる層があり、多くの造成土からなる遺跡という解釈に至った。



①除草作業



②草刈後状況（南から）

図版1 調査経過1

当初は、堆積する土の変化があった際には、その都度検出作業等を実施していたが、造成土の解釈を行った後からは、確認した遺構面までは堆積土が変化しても掘削作業を続け、一面に同じ層がそろった部分や遺構が形成されている面は検出作業を行うという発掘調査方法を採用した。

**遺構の時期特定** 上から順に調査を実施しているため、記録作業が終了した遺構は掘削したが、石積み遺構などは、遺構下部に別遺構が確認できない状況であれば掘削しなかった。これは最低限の情報を得るためと時間短縮を兼ねるためである。堆積土が何枚もある中で、石積みが機能していた面が判然としない状況もあることから、根石の状況、その高さでの遺構面などを把握するために掘削せず、石積み以外の部分を掘り下げながら調査を行った。この調査方法で、多くある石積みが築造された時期を特定することが出来た。また、SA1などは隣接する石積み(SA22等)が多くあり、当初は機能していた時期差を想定していたが、石積みを築造する際の築造順の差で機能時の時期差ではないことが判明した。

**Ⅲ区の調査成果** Ⅲ区では、近世期の造成土の堆積状況の保存状態が非常に良かった。近世2(18世紀代)の造成土(造成2～4)、近世3(中城御殿跡創建時～17世紀代)の造成土(造成6)、グスク1(15～16世紀代)の土(Ⅳ層)を層序的に確認することができた(図版2-③)。これにより、検出遺構の時期差が判明した。この成果を基にしてⅠ区、Ⅱ区の堆積状況を確認し、遺構の時期区分を行うことができた。

**グスク時代の層** Ⅴ区では、グスク時代の層が攪乱されて部分的であるが残存していた。堆積状況を見ると、土色やマーヅ粒の混入状況から4枚ほどに分層が可能で、かつグスク時代の層から掘り込まれる柱穴を確認することができた。また、地山面から掘り込む柱穴も確認し(図版2-④)、地山面とグスク時代の層の境目が極めて明確に分かれる部分(図版2-⑤)も確認できたことから、柱穴形成の時期差、当時期に地山面まで掘削を行い、柱穴を掘っていた状況が想定できる。

このようにグスク時代の層を何枚か確認することができたが、全体的に堆積が均一ではないことや、遺物組成などから時期差を示すことが困難であった。そのため今回は1つの時期差として捉えることとするが、今後検討すべき課題である。



③Ⅲ区の堆積状況



④柱穴断面



⑤地山とグスク時代層の節理面

図版2 調査経過2





⑥SJ3 検出箇所 堆積状況



⑦ I 区堆積状況

図版3 調査経過3

**II 区** II 区では、III 区で確認した近世3の層の下層に一枚造成土（造成7）を確認した。その下層からグスク1の土（IV層）を検出した。このグスク1が上部に堆積した状況でSA31・32・35を検出した。この遺構が今回の発掘調査で最も古い遺構であることが判明した。

**I 区** I 区では、SJ3（近世2）を造成土（造成4）下部で地山直上から検出した。この遺構を検出した部分で2枚の造成土（造成2及び4）が確認できた（図版3-⑥）。この造成土の状況とSA1の石積みの石の積み方が異なる部分が重なることが確認できた。このことにより、SA1は積み直しを行っていることを確認した。また、この造成土（造成2）の上層には水場遺構やニービ砂を中心とした造成土（造成1）が確認できた（図版3-⑦）。この造成土（造成1）上に、SQ群がある。これらの遺構はSJ3（近世2）の時期よりも後に築造されていることが層序的に明らかであり、かつ中城御殿が移転する直前まで機能していたと考えられる。このことからSA1は近世2の頃に築造され、移転する段階まで機能していたことがわかる。

**屋敷配置** I 区の水場遺構やSQ群がある遺構面の高さ、SA1を境としたIII 区では遺構面の高さが異なる。しかし、I 区やIII 区の堆積状況から、同時期の遺構面と考えられ、中城御殿の屋敷配置は階段状であったことが考えられる。

**遺構記号の付与と報告方法** 調査時には、第2表のように遺構記号を設定した。この中でもSK（土坑）、SM（石組土坑）は検出した当初に遺構名をつけたため、調査を進めるとSK（土坑）と考えていたものがSM（石組土坑）と判明する場合がある。この場合、遺構が数多く確認され、修正を行うと混乱が生じたことから、遺構名は修正していない。そのため、本報告での遺構名は調査時の遺構名のままである。遺構の解釈と遺構名が合わない場合があるが、このように報告する。

第2表 遺構記号凡例

遺構記号	遺構種類	遺構記号	遺構種類	遺構記号	遺構種類	遺構記号	遺構種類
SA	石積	SG	集石	SM	石組土坑	SS	石敷き・塼敷き
SB	建物	SH	—	SN	—	ST	—
SC	—	SI	—	SO	—	SU	遺物集積
SD	溝	SJ	遺物埋設	SP	柱穴・ピット	SV	—
SE	井戸	SK	土坑	SQ	石組柱	SW	石積擁壁
SF	—	SL	炉・カマド	SR	石列	SX	不明遺構



**現地説明会・普及活動** 発掘調査を実施している部分が、首里高校内であったことから、首里高校と協力して、各クラスに対して、社会科の授業時に現場説明会を実施した（図版4-⑧）。また、随時、中学生や高校生の職場体験の受け入れを行った（図版4-⑨、⑩）。

今回の調査時には、平成25年12月21日に1回目の一般県民を対象とした現地説明会を実施した。また調査最終段階として平成27年2月21日に2回目の一般県民を対象とした現地説明会を実施した（図版4-⑪）。2回の現地説明会の実施時と同じ時期に、沖縄県内の教育委員会や沖縄考古学会など、埋蔵文化財関係者を対象とした現地説明会を実施し、他市町村の事例や意見交換を行った（図版4-⑫）。首里高校関係者を対象とした現地説明会も随時行った（図版4-⑬）。



⑧現地説明会（首里高校生）



⑨職場体験 1



⑩職場体験 2



⑪現地説明会（一般）



⑫現地説明会（県内市町村関係者）



⑬現地説明会（首里高校関係者）

図版4 調査経過4

## 第2節 層序概要

今回の発掘調査では、調査開始当初から、多くの包含層や造成土の存在が想定されたことから、層序を区分する際に、大きく4層に区別することとした。

I層：現代……首里高校のグラウンド造成土など。攪乱層も含む。

II層：近代……戦前、戦後の首里高校関係の層。

III層：近世……中城御殿に関連する層。17～19世紀（中城御殿跡が移転するまでの層序）

IV層：グスク……中城御殿が創建される以前の層。15～16世紀

発掘調査中は、中城御殿を創建する際に持ち込まれたと考えられる造成土が多くあり、ほぼ同時期に堆積したと確認できる土だが、色や混入物などが、全く異なっている状況があった。このため、検出した造成土に対し、III-1層、III-2層として大きく近世期の層序の一つとして便宜的に層序名を付与した。ある程度の状況が判明した際に、層序をまとめていく作業を行った。このまとめた層序は第4節に記載する。

I層（現代）及びII層（近代）については、調査中は上記のように層序を区分していたが、調査の結果、それぞれの層でそれほど大きな時期差はないと判断したため、細かく分類した層序は全て、I層、II層出土遺物とした。

III層（近世）は中城御殿を構成する層で、多くの層序名を付与した。ある程度の状況が判明した際に、造成土の検出状況や遺構の関係性、遺物出土状況から判断して層序をまとめる作業を行った。その結果、III層（近世）は中城御殿を築造する際の造成土であることが判明した。そこで、III層（近世）は造成土と改め、造成1～8までに大きく区別し、基礎となる遺構を基に近世を区分した。

IV層（グスク）は当初、いくつかの層序がみられたため、それぞれ区別していたが、調査結果を総合し、全てIV層出土遺物とした。層序はまとめたが、調査中はマージ粒の混入量や混入物の大きさ、土色に若干の違いがあった。これは、当時期に何度かにわたり土壌の堆積が行われたことを示していると考えられる。グスク時代より古い層及び遺構については、今回の発掘調査では確認されなかった。層序の土色や混入物など、特徴的なものについては、第3表の通りである。

## 第3節 遺構の時期区分

今回の発掘調査では、層序概要で述べたとおり、遺構と造成土の関係性から時期区分を行うことができた。遺構内から出土した遺物は後世の攪乱を受けているものが少なく、非常に良い出土状況を保っていた。そのため本報告では遺構出土遺物を中心に報告を行うこととする。

今回の報告では、調査時に検出した造成土と遺構の広がりをもとに近世の遺構を3つに区分した。グスク時代の遺構のSA31・32・35は、グスク時代層が上部に覆っている状況で検出した。しかし、出土遺物での時期差等に関しては判然としなかったため、グスク時代を二分し、最も古い時期を設定している。これらの年代観は、主に出土した陶磁器類から想定している。

時期区分年代と遺構内出土の遺物が古い様相を示す場合もあるが、基本的には各造成土に基づく時期の遺構として下記の通り報告する。遺構内で一括性が高い遺物については年代幅が特定できる遺構も存在する。その場合は遺構毎に報告する。

### 近・現代の遺構・遺物

近世1（18世紀末～中城御殿移転まで）…造成1及び造成2上部

近世2（18世紀代）…SJ3前後の造成2及び造成4

近世3（中城御殿跡創建～17世紀代）…SK51などの石組土坑を覆う造成6や造成7及び造成8

グスク1（15～16世紀代）…IV層、SK51、SM22など

グスク2（15～16世紀代）…IV層に覆われたSA31、32、35など

上記区分の移行期の遺構も存在し、その場合、近世2～3というような表記を行い、新しい時期の部分で報告を行うこととする。

## 第4節 層序と遺構・主な遺物

### 第Ⅰ層 現代

層の状況：表土、攪乱層。主に戦後の開発により攪乱された層や、持ち込まれた土砂。コンクリートや鉄筋なども混じるが、中城御殿の遺物も混入する。

### 第Ⅱ層 近代

層の状況：戦前の層。一部では近世の土も混入している。沖縄県立第一中学校やその他の開発により持ち込まれた層で、開発時に掘り返された層も含まれる。出土遺物は新旧含まれるが、中城御殿の遺物も混入している。

### 第Ⅲ層 近世

層の状況：近世の層で、中城御殿を創建する際の造成土が中心となる。Ⅲ層はそれぞれ、造成1、造成2…と名称をつけたので、下記にその特徴を記す。

- 造成 1：Ⅰ区を中心に堆積している層で、ニービ混じりの層。SQ群の構築層で水場遺構も関連。
- 造成 2：近世造成土の中で、上部に堆積していた層。調査区北側を中心に広がる。一部では上部に堆積しているⅡ層と混ざる部分もある。SJ3を覆う造成土。
- 造成 3：調査区南側を中心として堆積している層。造成2に比べ、混入物などが少なく、様相が異なる状況もあるが、ほぼ同時期に堆積した層と考えられる。
- 造成 4：造成2の下部に見られる層。調査区全体に広がる。クチャ、マージ粒混じりの暗褐色土や拳大の石灰岩礫等が互層状に堆積する状況が確認できた。層上部でSJ3を検出。
- 造成 5：SA9の下部のみで確認できた層。出土遺物には、中国産青磁、中国産青花などがまとまって混入し、新しい遺物の出土が少ない。
- 造成 6：調査区北側を中心に確認した。造成4の下部に堆積している層。混入している石灰岩礫の大きさなどが造成4とは異なり薄い堆積をしており、層上部は平たく成形している状況も確認でき、上部は一部削平されている。層下部にはマージ層がなく、岩盤が露出する場所もあるため、近世段階で岩盤まで削平し、その上部に造成した土と考えられる。中城御殿創建時の造成土と考えられる。SK51などの石組土坑を覆う造成土。
- 造成 7：造成6の下部に堆積し、Ⅱ区のみで確認した層。造成6に比べ石灰岩礫の混入が少なく、マージブロックが混入する特徴をもつ。
- 造成 8：調査区南側を中心に堆積した層。暗褐色土を中心とし、石灰岩礫の混入などが少ない。中国産青磁などに、明朝系瓦（灰）などが混入する層。

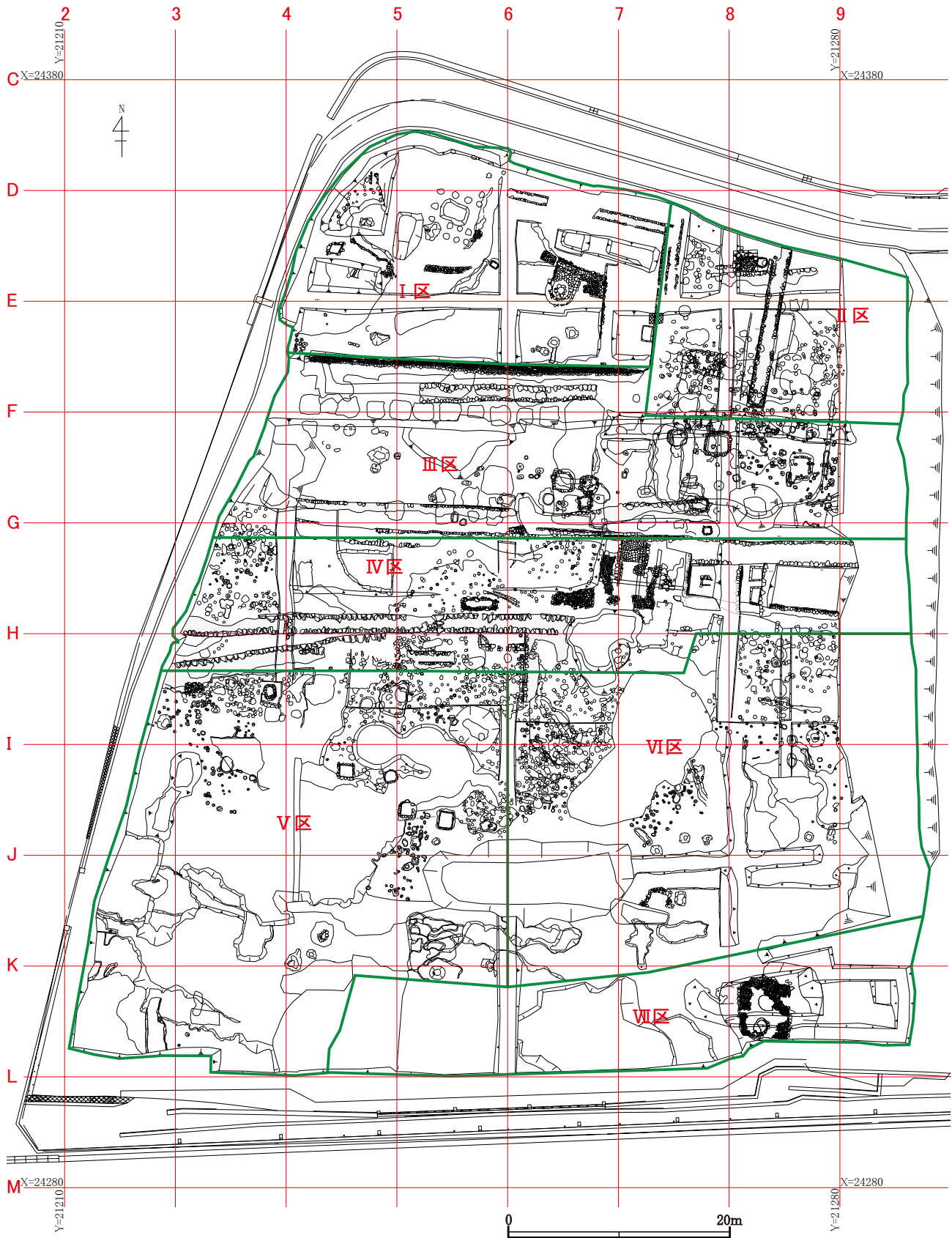
### 第Ⅳ層 グスク時代

層の状況：15～16世紀の遺物が出土する層。一部に17世紀前半代の遺物が混入する。暗褐色土、黒色土が中心で石灰岩礫がほぼ混入しない。マージ粒などの混入差でいくつか分層可能だったが、明確な時期差を把握することが困難なため1つの層にまとめた。

第3表 層序一覧

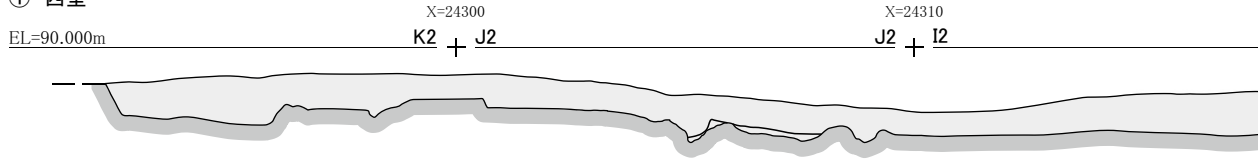
層序	主な色調	年代	概要	層序	主な色調	年代	概要
Ⅰ層	暗褐色	表土・攪乱	戦後開発に伴い持ち込まれた土砂。	造成4	暗褐色・黄褐色・褐色	近世2	調査区全体に堆積。石灰岩礫、マージブロック、クチャなどが交互に混入。層上部でSJ3を検出。
Ⅱ層	暗褐色 赤褐色など	近代	戦前頃に開発により持ち込まれ、掘削などを行った層。	造成5	暗褐色	近世2～3?	SA9の下部のみで堆積。やや古い様相を示す。
瓦溜り	—	近代	瓦のみが堆積した層。明朝系瓦（赤・灰）が混入。	造成6	暗褐色	近世3	調査区北側に堆積。石灰岩礫やマージ粒の混入が造成4と異なる。岩盤削平後の造成土。Ⅲ区で検出したSK51等の石組土坑を覆っている造成土。
造成1	オリーブ褐色	近世1	Ⅰ区に堆積。ニービ混じりの土。SQ群の構築層で水場遺構関連の層。	造成7	暗褐色	近世3	造成6の下部で堆積。石灰岩礫が少なく、マージブロックが多く混入する。Ⅱ区のみで確認できる。
造成2	暗褐色～ 黒色	近世1～2	調査区北側に堆積。石灰岩礫、マージブロックなどが混入。一部Ⅱ層も混ざる。SJ3を覆う造成土。	造成8	暗褐色	近世3	調査区南側に堆積。石灰岩礫、マージブロックなどが混入。
造成3	暗褐色～ 黒色	近世2	調査区南側に堆積。石灰岩礫、マージブロックなどが混入。造成2と同時期に堆積。	Ⅳ層	暗褐色～ 黒色	グスク時代	調査区全体に堆積し、石灰岩礫はほぼ混入なし。マージ粒が混入する。



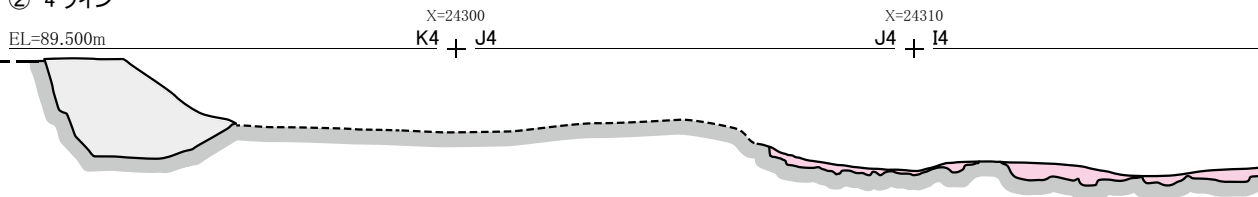


第4図 グリッド設定と調査区

① 西壁



② 4ライン



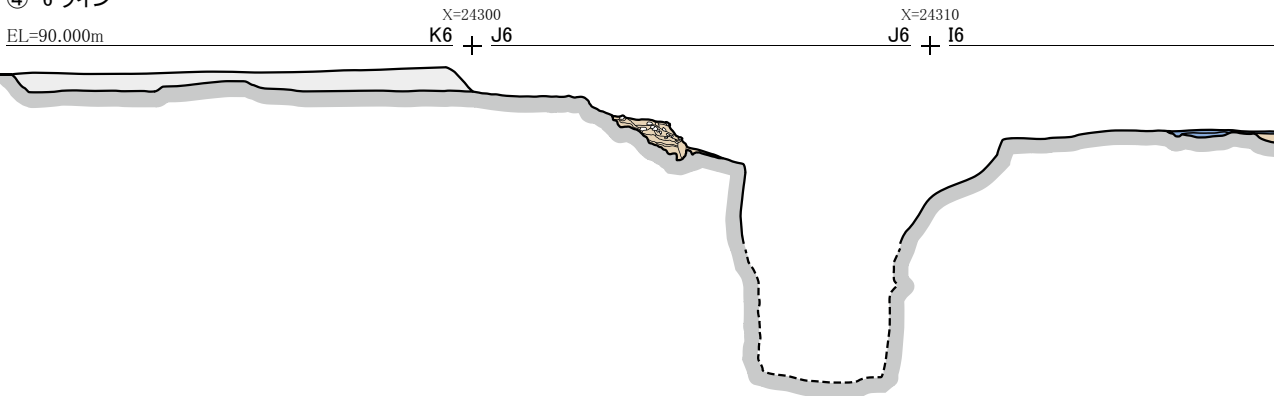
G・H-4 東壁



K-8 西壁

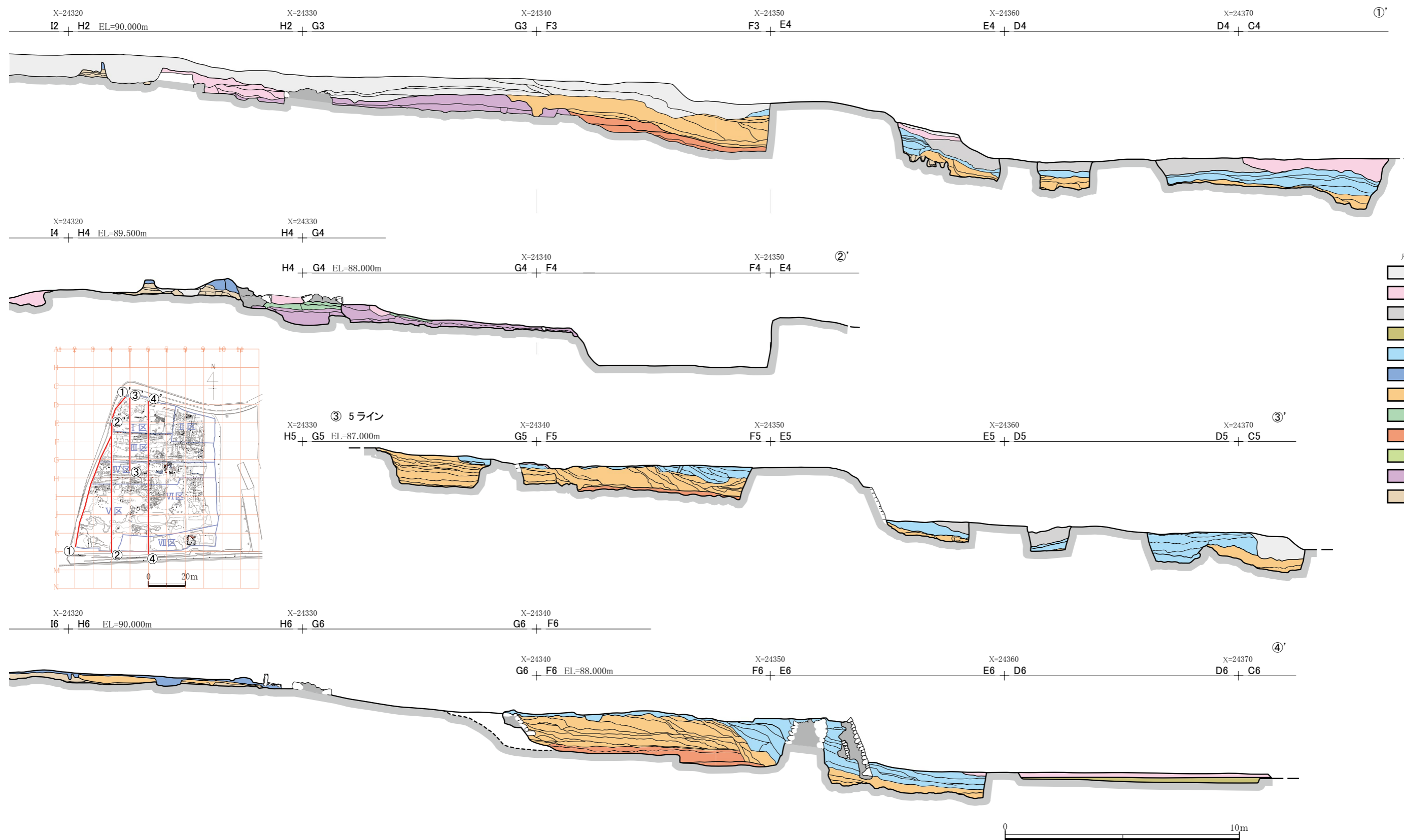
図版5 壁面①

④ 6ライン



第5図 壁面①











E-5 北壁



E-6 北壁



E-7 北壁



E-6 北壁



F-5 西壁



F-5 西壁



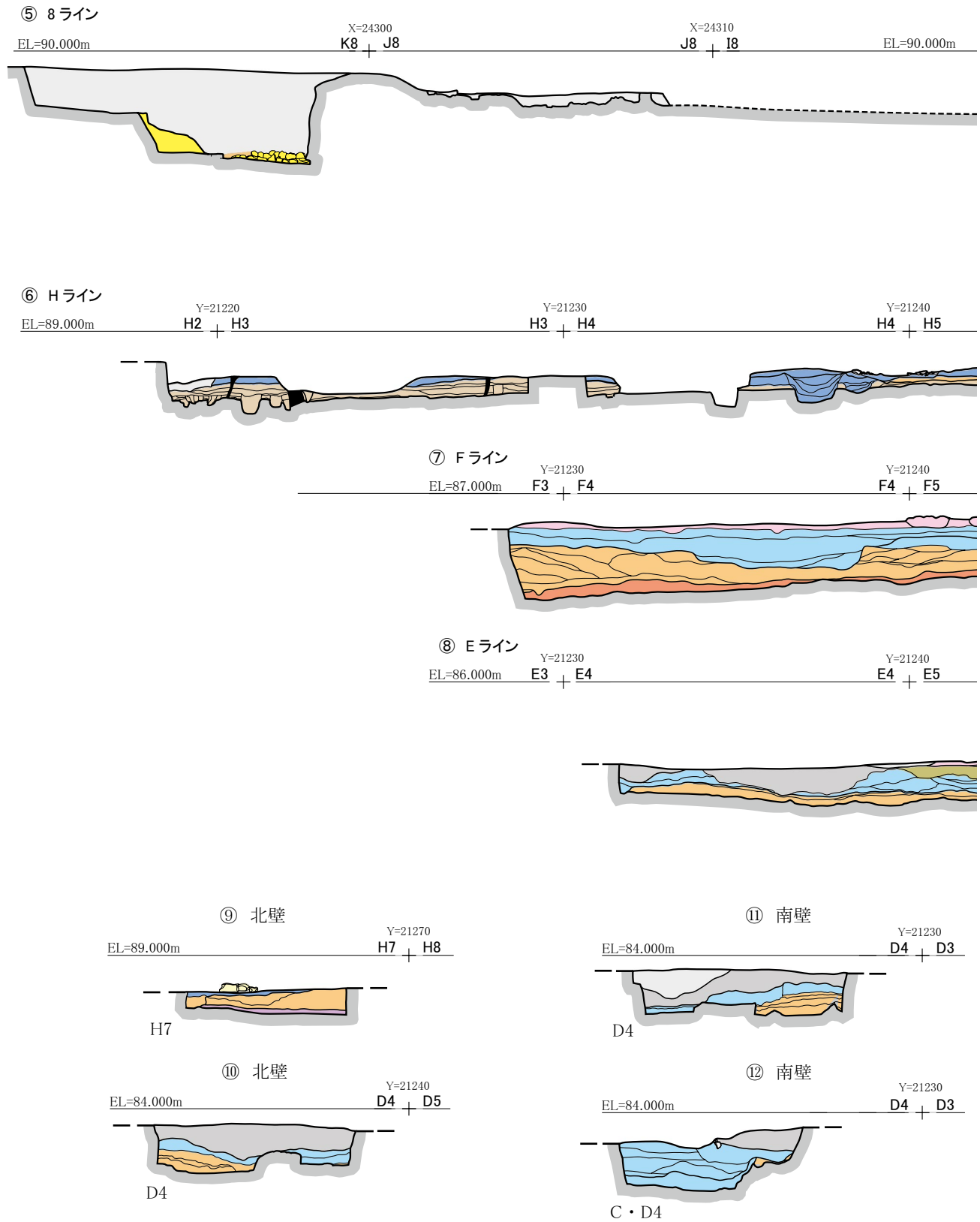
F-6 西壁



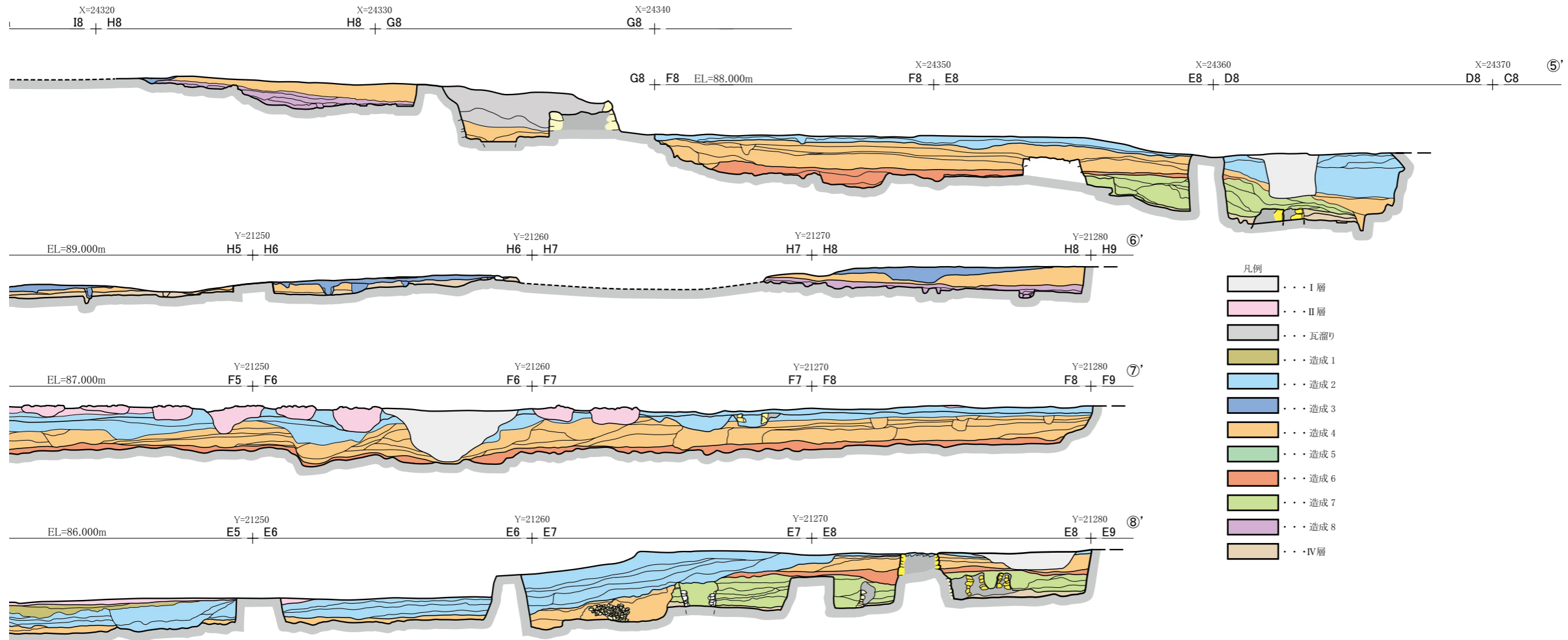
F-6 西壁

図版6 壁面②

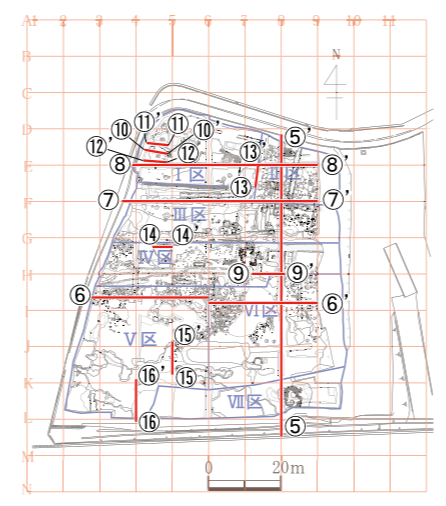
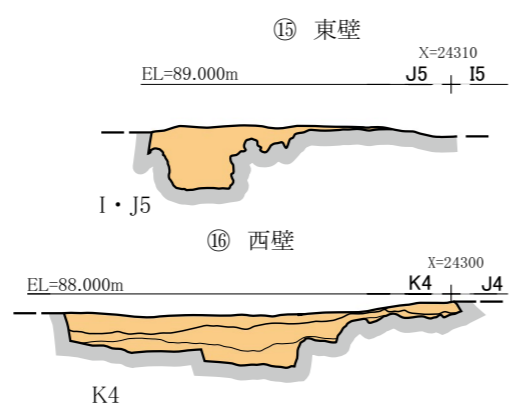
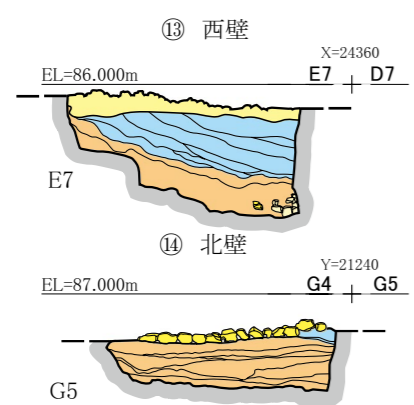




第6図 壁面③



- 凡例
- . . . I層
  - . . . II層
  - . . . 瓦溜り
  - . . . 造成1
  - . . . 造成2
  - . . . 造成3
  - . . . 造成4
  - . . . 造成5
  - . . . 造成6
  - . . . 造成7
  - . . . 造成8
  - . . . IV層







## 第5節 資料整理作業

発掘調査に係る資料整理作業は、平成25年度から随時実施し、平成27年度から平成28年度にかけては、民間調査組織の株式会社アーキジオパシフィック支店と支援業務委託契約を締結し、報告書刊行に向けた資料整理作業を実施した。

**整理作業の開始** 整理作業を始めるにあたり、洗浄済みの遺物と未洗浄の遺物が混在している状況だったため、これらの確認作業を行うとともに、遺構毎、層序毎、それぞれに選別しながら作業を進めた。その後は遺構や層序毎に注記作業を実施した。注記作業の完了した遺物は順次分類を行い、分類作業と並行して報告書に掲載するための遺物選別を行った。これらの作業を行う中で、膨大な量が出土した自然遺物の骨・貝類の洗浄作業を進めた。

**報告遺物の選定** 報告書掲載のための遺物選別は、当初千点以上の遺物を選別している状況であった。そのため、再度遺物を詳細に観察し、同種類となる遺物の確認や遺構の年代観や遺物組成を示す遺物の再確認を行った。その結果選別した遺物を本報告書に掲載し、報告することとなった。

**整理作業の方法** その後は、実測図化作業、ロットリングペンを用いたトレース作業、遺物写真撮影、図版作成、巻頭図版撮影を実施した。トレースが完了した実測図は、スキャニングを行い、パソコン上で遺物の写真と合成作業を行った。色調や文様、調整痕については写真で示すこととしたが、色絵など、色が写真に写らない部分や拓本が必要な遺物については別途、実測及び拓本作業を行った。自然遺物は種の同定後、図版用資料を抜き出し、集計作業を行った。

**資料整理指導** 整理作業中には随時、有識者に陶磁器、自然遺物などの検討・分析を依頼するとともに、比較資料収集として各地で調査を実施した。また当センター職員のみならず、県文化財課職員や県内・県外市町村埋蔵文化財行政職員にも様々な教示を得ながら検討・分析作業を行った。

**収蔵方法** 次に出土遺物の報告書掲載以外の遺物の収蔵方法について述べる。遺構出土の遺物は、中国産青磁、中国産白磁、中国産青花、などの遺物種類毎のコンテナを作成し、その中にSA、SK、SMなどの各遺構の袋に出土遺物を収納するという収蔵方法を選択した。

遺構以外の造成土等出土遺物は、僅かな地点の違いで層の色や混入物などが異なる状況もあったため、調査時はA-1、A-2などのグリッド設定を行い、グリッド毎で遺物取り上げを行った。注記の際もグリッド名を記入している。資料整理作業を進めるにあたり、調査中に分けた層序状況が離れた地点で色や混入物などが異なる時でも、堆積時期の共通性などがある程度の妥当性を持つことが判明してきたため、収蔵する段階ではグリッド毎に収納せず、層序毎に収納することとした。

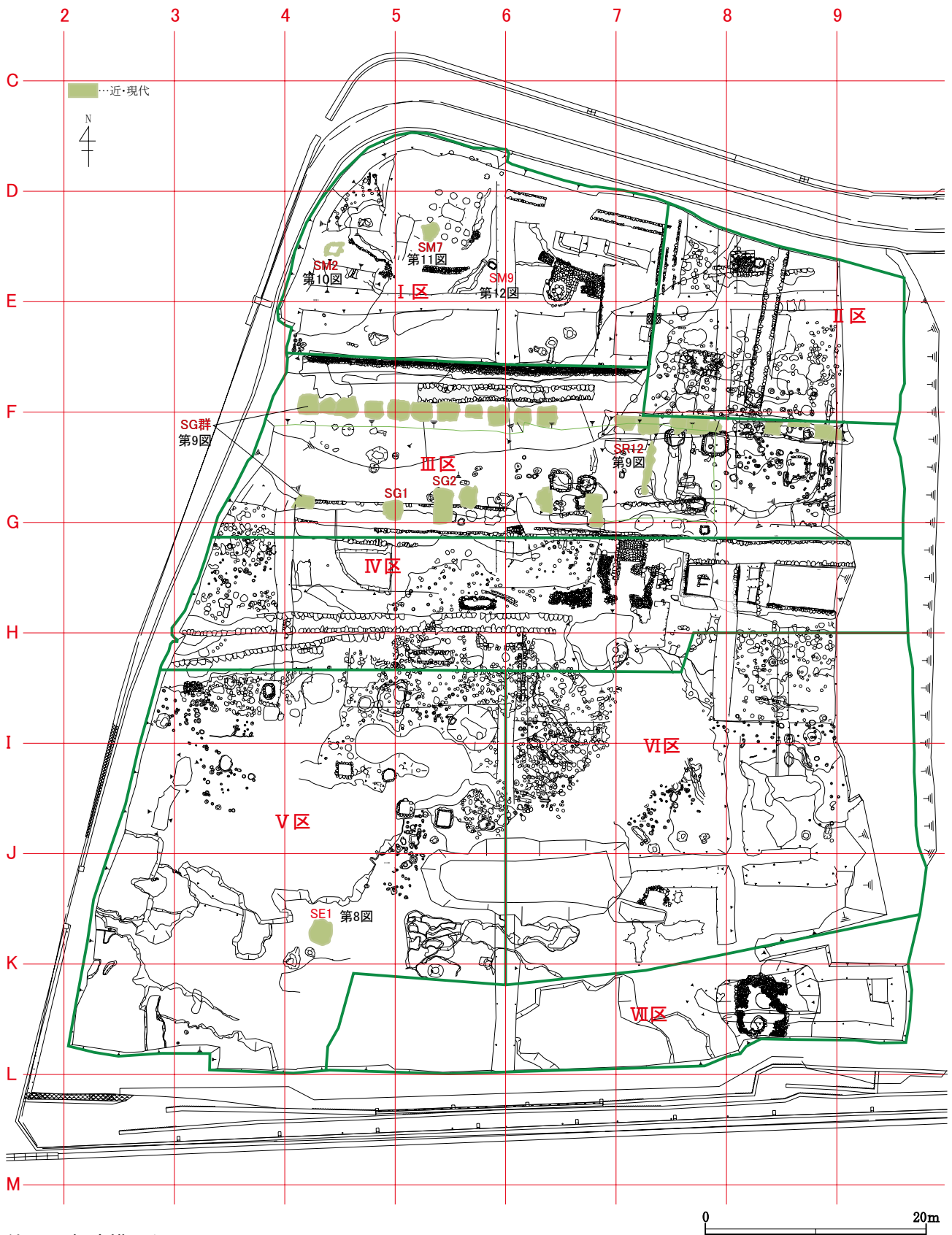
自然遺物の報告書掲載以外は、各遺構や出土地点及び出土層毎で収蔵している。その中で、SK22・51・59、SM12・13、SX14出土のヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、タカラガイ科、ハマグリ類については、他遺構と比べ、特徴的な出土状況を示していた。そのため、別コンテナを設け、その中に収蔵した。



職場体験1



職場体験2



第7図 各遺構(近・現代)



## 第4章 発掘調査の成果

### 第1節 近・現代の遺構・遺物

今回の発掘調査では、近・現代に相当する遺構及び埋土が見られた。発掘箇所がグラウンド部分のため、遺構上部に堆積していた土は現代の造成土である。そのため近・現代の遺構や埋土との判断が困難な部分もあった。ここでは、代表的な遺構を報告する。

#### 第1項 近・現代の遺構・遺物

##### A：遺構

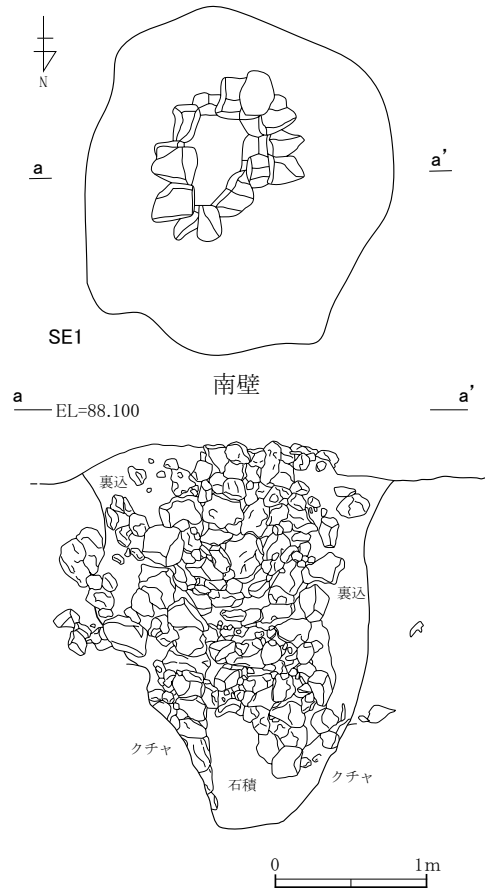
##### SE1

クチャの層まで掘り込んだ井戸。直線的に掘り込んだ井戸で、井戸の石積み部分は崩れている部分が多かった。井戸の掘り込み部には、裏込の土にクチャも混在しており、井戸を掘った土を裏込に使用している。天端部分は残存していないため、上部構造は不明。井戸内部から水を汲むための道具の一部である金属製品が見つかったことから、上部構造には、つるべのようなものがあつたことが想定できる。調査中も水が湧いていた。井戸の内部からは、硯、インク入れ、沖縄産陶器類、本土産陶磁器類、瓦類等が出土している。これらの遺物はまとめて出土しており、特に硯は51点出土している。また第13図6は硯の裏面に「本高嶋 中村八兵衛」と製作者名が残存している。第13図5は裏面に「島袋」などの名前が多く掘られており、当時の生徒名と考えられるものもある。

第14図8は裏面に「伊佐成功」と記名があり、側面には「S. ISA」とあり、ローマ字で名前を書いているものもある。

様々な遺物が乱雑に混入するわけではなく、特定の遺物がまとめて出土している状況や、出土遺物の組成から、沖縄戦の直前に沖縄県立第一中学校の関係者がまとめて廃棄したものと考えられる。

調査時は遺構の断ち割りを行い、断面状況を確認した時点で記録をとり調査を完了した。



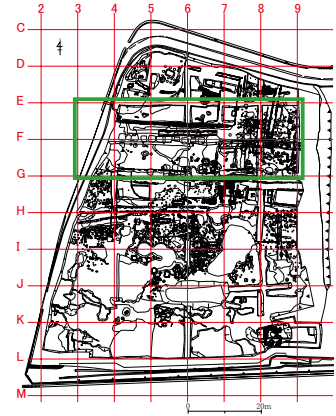
第8図 近・現代の遺構1



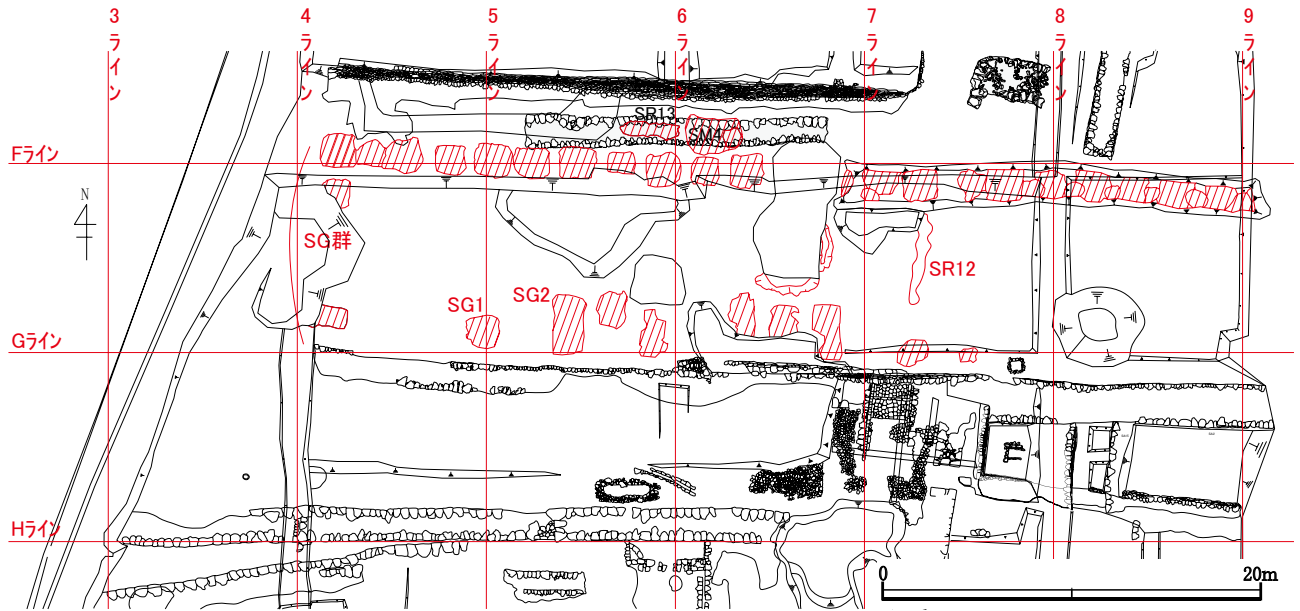
SE1 半裁状況（北から）

SG2・SR12

SG1からSG37（以下SG群）までは現存している戦後の首里高校の基礎図面（養秀同窓会 1980）と照らし合わせると検出した遺構と重なることから、沖縄戦後の首里高校の柱基礎と考えられる遺構である。検出した段階では石敷き遺構と考えられたが、下部に石灰岩礫が充填され、その上部に薄く石敷きが残存していることが判明した。その上部に校舎の柱があったと考えられる。SR12はSG群から垂直に伸びる遺構。上部は削平され、全形は不明だが、2列のSG群を結ぶ位置で検出していることから何らかの関連性のある遺構と考えられる。出土遺物は特徴的な遺物が出土しているSG2、SR12から出土しているものを第14図に示す。



調査は平面記録と写真撮影を行い、いくつかの遺構断面の記録をとり、すべての断面記録を取ることとは行っていない。記録作業完了後は全て掘削した。



第9図 近・現代の遺構2



SG 半裁状況（東から）

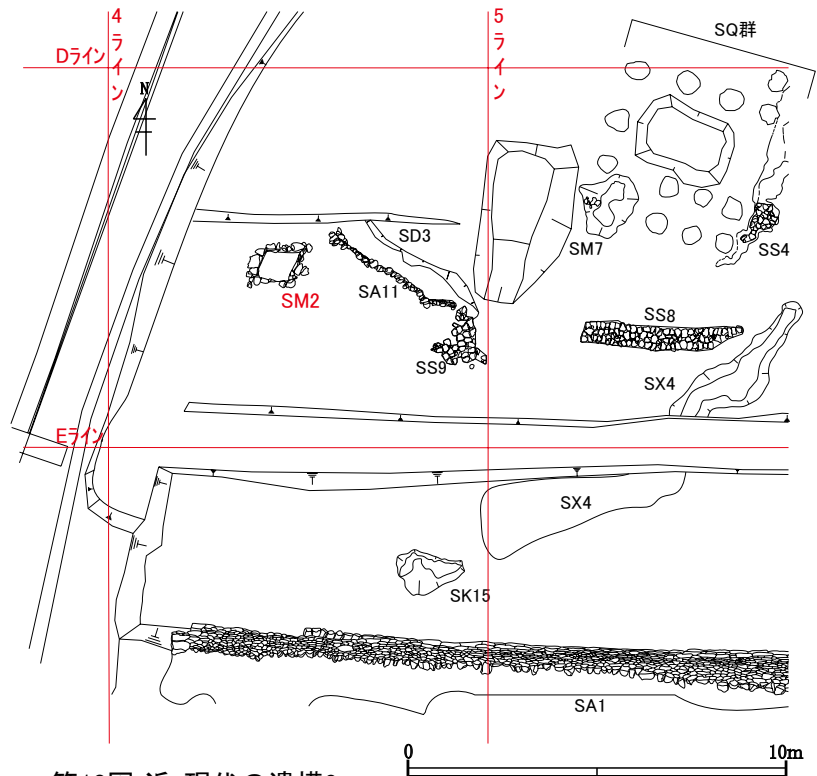
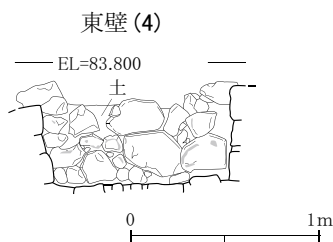
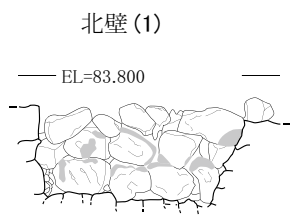
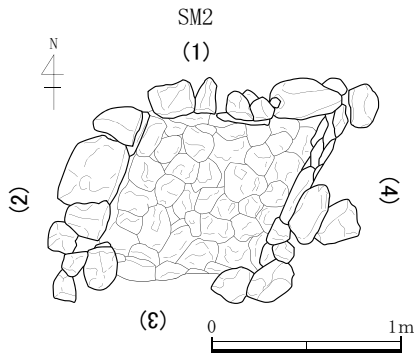
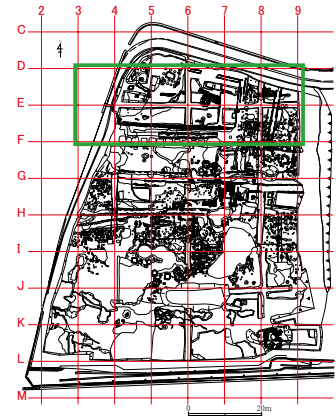


SG 群検出状況（東から）



SM2

石組方形遺構だが、削平により崩れていることもあり不定形である。遺構石積みの一部には漆喰が付着しており、全面漆喰が塗られていたと考えられる。漆喰付着部は立面図に図示した。また、遺構底部には石敷きがあり、排水を目的としていないことから、水溜として使用された可能性がある。遺構内部を半裁し、断面記録を取った後、遺構内部の埋土を全て除去した。その後立面記録を作成した時点で完掘とした。



第10図 近・現代の遺構3



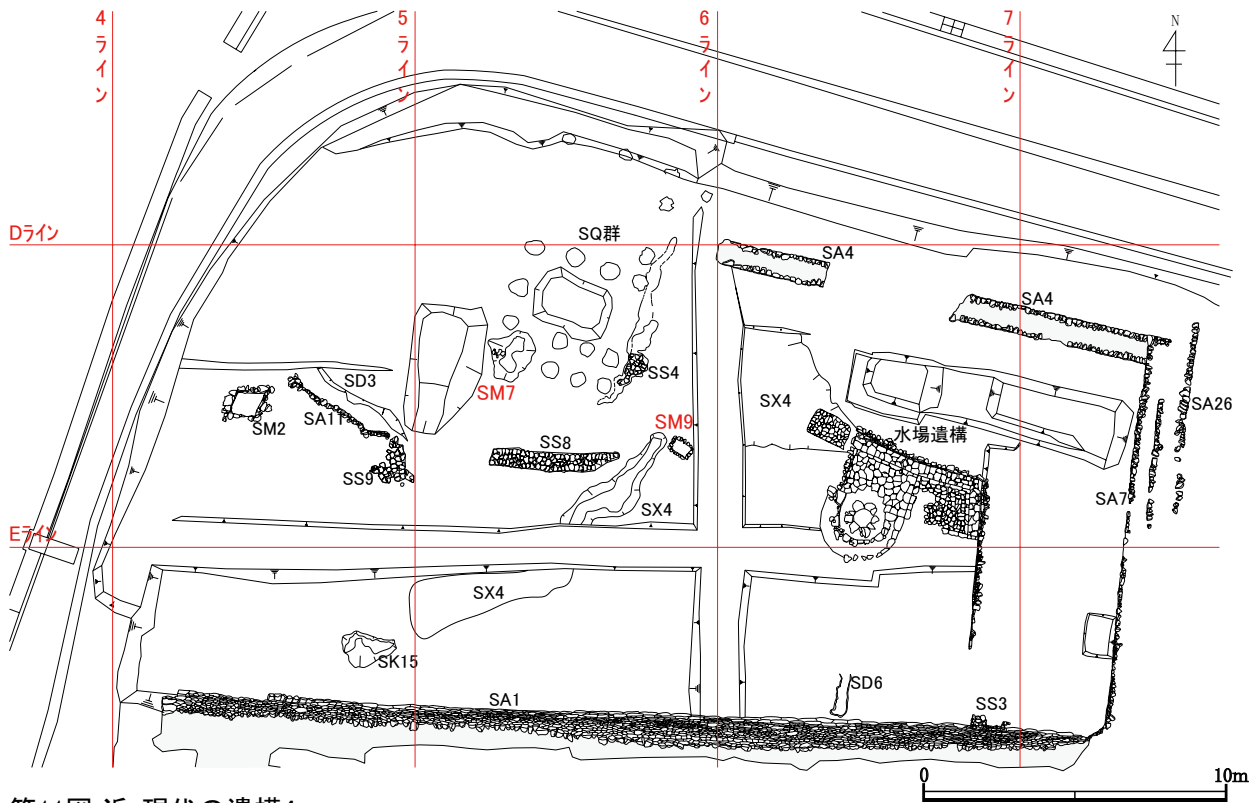
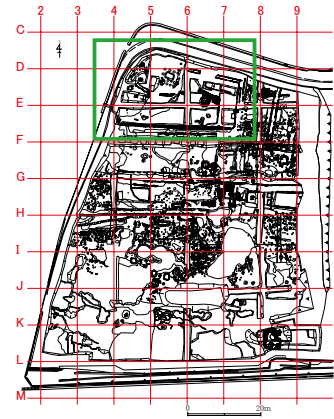
完掘状況 (南から)

SM7

当初、石列が見えたため、石組方形遺構と考えられたが、発掘を進めると石列はなく、素掘りの遺構と判明した。後述するSQ群（石組柱跡群）の遺構を切るように形成されている。用途は不明。

SM9

石組長方形の遺構。遺構底部には石敷きはなく、造成2上に石積みをして形成した遺構。遺構内の堆積は、分層を行った結果、使用終了後に堆積した土と判断した。本来は水場遺構など同時期に機能していた可能性がある。遺構内部からは沖縄産陶器の鉢、本土産陶磁器が出土している。



第11図 近・現代の遺構4



SM7 検出状況（東から）

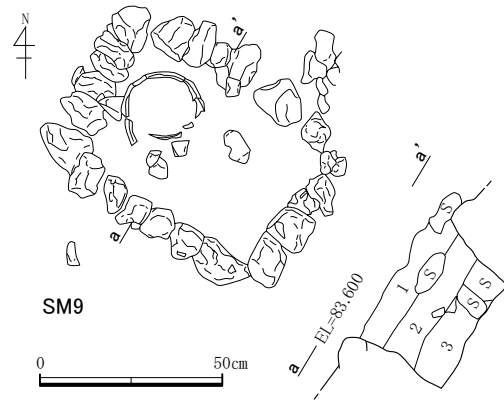


SM7 完掘状況（東から）





SM7 検出状況（南東から）



第12図 近・現代の遺構5



SM9 検出状況（北東から）



SM9 出土状況（南東から）

**B：遺物**

近・現代の遺構からは、沖縄産陶器類をはじめ、本土産陶磁器類が出土している。SE1からは、学校に関連する遺物として、硯やインク瓶が出土している。これらは学校用具をまとめて廃棄されている状況から、沖縄戦直前に廃棄されたものである可能性が高い。

個々の遺物様相については第4表に記す。各遺物の参考文献等は本書末にまとめて記す。



SM9 半裁断面（南東から）

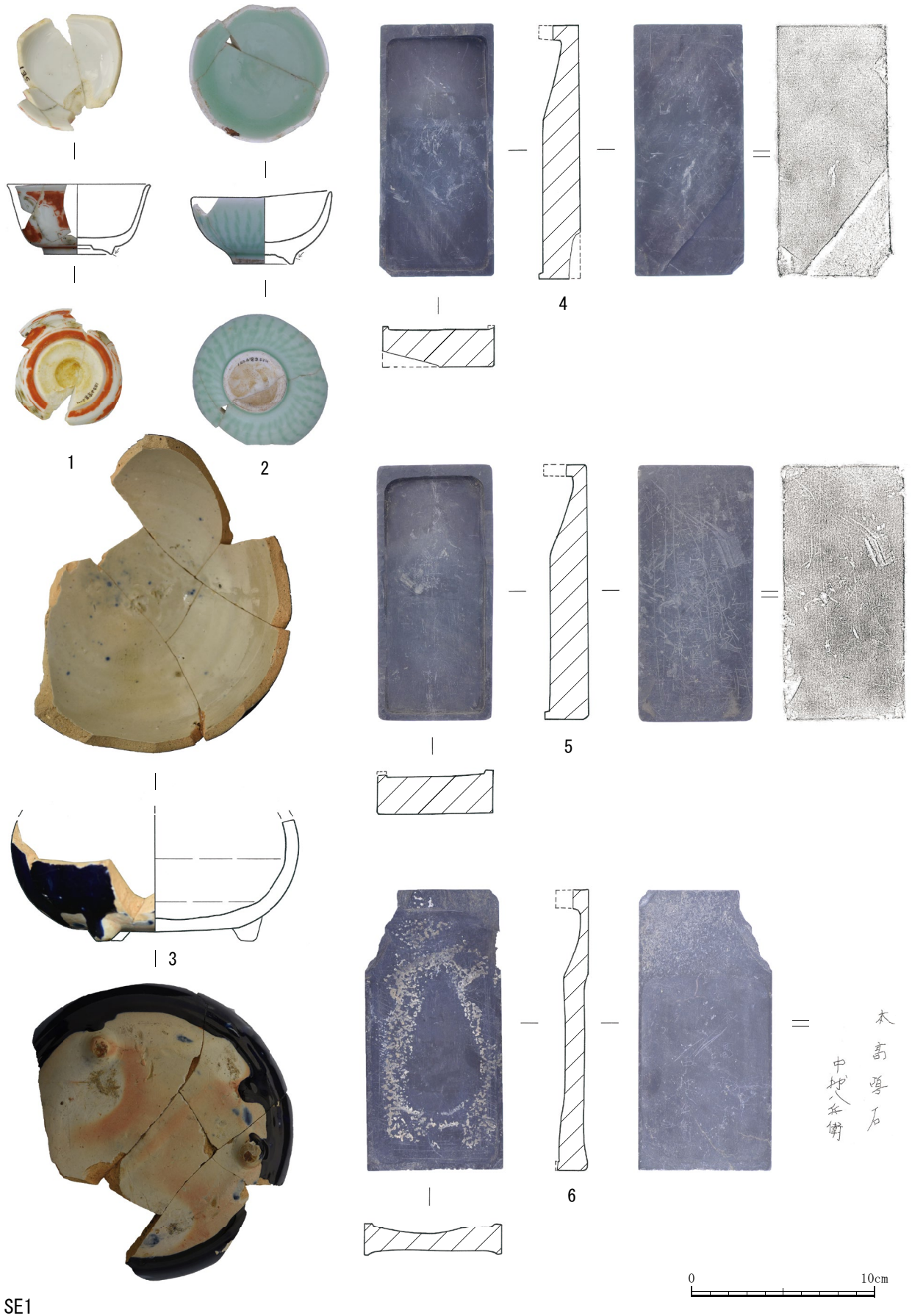
第4表 近・現代 出土遺物観察一覧a

挿図番号 遺物番号	種類	器種	分類	部位	法量 (cm)			観察事項	出土位置		
					口径	器高	底径		遺構	層序	
第13図	1	本土産色絵	小碗	—	口～底	7.7	3.75	3.7	外反口縁。畳付～高台内は露胎。高台は蛇の目凹高台。高台内に窯詰め痕。	SE1	—
	2	本土産青磁	小碗	—	口～底	7.6	高:3.95 低:3.6	3.3	クロム青磁で瀬戸・美濃産。直口口縁。畳付から高台内は露胎。高台内はアーチ状に削られる。外面にはくずれた錦蓮弁文状。『大正二年のせともの屋』に類似あり。	SE1	—
	3	沖縄産施釉陶器	急須	—	底部	—	—	9.0	大振りの急須。底部平底で円錐状の脚が2本残存で元は3本と考えられる。内外面に白化粧土。外面腰部まで瑠璃釉。内面透明釉。外底に窯詰め痕。	SE1	—

第4表 近・現代 出土遺物観察一覧b

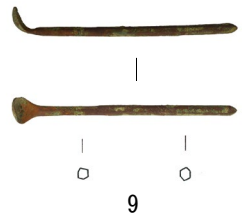
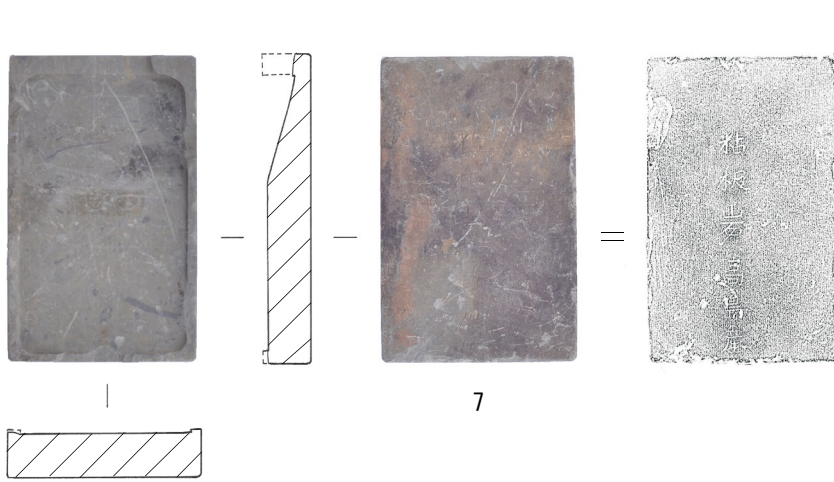
挿図番号 遺物番号	種類	器種	分類	部位	法量 (cm)			観察事項	出土位置		
					口径	器高	底径		遺構	層序	
第13図	4	石製品	硯	-	破片	-	-	-	平面形は長方形。横断面の側面形態は垂直、裏面形態は平坦。黒色系石材。	SE1	-
	5	石製品	硯	-	破片	-	-	-	平面形は長方形。横断面の側面形態は垂直、裏面形態は平坦。裏面に「高」「篤」が書かれる。その他は「島袋」など人名（学生か）が書かれる。黒色系石材。	SE1	-
	6	石製品	硯	-	破片	-	-	-	平面は長方形。側面形態断面は垂直、裏面形態は隅丸長方形に浅く湾曲して窪む。使用により陸部中央が窪む。裏面「本高（嶋）石」「中村八兵衛」銘。黒色系石材。	SE1	-
第14図	7	石製品	硯	-	破片	-	-	-	平面は長方形。側面形態断面は垂直、裏面形態は平坦。裏面に「粘板岩」「高島産」「湧■」。黄緑系石材。	SE1	-
	8	石製品	硯	-	破片	-	-	-	平面は長方形。側面形態断面は垂直、裏面形態は隅丸長方形に浅く湾曲して窪む。赤色系石材（赤間石か）。裏面に「伊佐成功」や「月一人求之」。側面に「S.ISA」	SE1	-
	9	青銅製品	簪	-	完形	-	-	-	カブ匙型で本簪（ジーファー）。断面六角形。	SE1	-
	10	銭貨	-	-	-	-	-	-	中央に方形の孔。無文銭。	SE1	-
	11	ガラス製品	インク瓶	-	完形	-	-	-	平面形が方形の頸部をもつ角瓶。底部中央が円形に浅く窪む。側面に「CAW' SINK」「11347」エンボス加工。	SE1	-
	12	ガラス製品	インク瓶	-	完形	-	-	-	胴部円形の瓶。煙突状に延びる口縁をもつ。口縁底は窪みを持ち、インクを溜める構造をもつ。型の合わせ目が残る。	SE1	-
	13	明朝系瓦（灰色）	軒丸瓦	-	瓦当	-	-	-	石積みの上部などに葺かれた瓦。瓦当に左巻の三つ巴文。	SG2	-
	14	中国産青磁	播鉢	-	口縁	13.4	-	-	口縁外反し、口唇平坦に成形。口縁内面下部からは露胎。10本前後の櫛目を施す。	SR12	1層
	15	本土産染付	碗	-	口縁	-	-	-	外反口縁。外面に梅の木が描かれる。	SR12	1層
第15図	16	沖縄産施釉陶器	鉢	-	胴部	-	-	-	内外面に白化粧土。外面は全面青緑釉を施釉。内面は胴上部まで施釉され、釉垂れあり。内面には窯詰め痕ありか。内面に煤付着。	SM2	1層
	17	沖縄産無釉陶器	鉢	-	口縁	-	-	-	内彎口縁で口縁先端断面は三角形。口縁外面に二条の沈線めぐり、その下部に波状文。	SM2	1層
	18	中国産青花	碗	-	口縁	-	-	-	外反口縁。外面に草文。	SM7	-
	19	中国産褐釉陶器	壺	-	底部	-	-	16.0	ロクロ成形。外底も丁寧に成形。	SM7	-
	20	明朝系瓦（灰色）	軒丸瓦	-	瓦当	-	-	-	范作り成形。上原：草花文側視I型第I文様系B式 石井：牡丹文様II系	SM7	-
	21	鉄製品	釘	-	完形品	-	-	-	断面方形の釘。頭部を一方へ折る。	SM7	-
	22	沖縄産施釉陶器	碗	-	口縁	8.4	-	-	外反口縁。内面には白化粧土。口縁部は鉛釉施釉。口縁内面下部からは透明釉。	SM9	1層
	23	沖縄産施釉陶器	鉢	-	口～底	22.2	9.25	8.2	口縁端が外に下がる器形の鉢。内面には白化粧土。高台先端は逆台形状。外面鉄釉、内面は透明釉。見込みは蛇の目釉剥ぎ。釉剥ぎ部に窯詰め痕。	SM9	1層
	24	本土産染付	蓋	-	-	庇:10.6 袴:9.8	-	-	線状の粘土を貼り、撮みとする蓋。呉須型紙刷りで草花文。底部は露胎。内面には透明釉施釉。	SM9	2層
	25	沖縄産施釉陶器	蓋	-	-	11.2	-	-	口唇露胎で平坦。内面露胎。外面には鉄釉。	SM9	2層
26	沖縄産施釉陶器	鉢	-	口縁	-	-	-	内彎口縁。内外面に鉛釉。口唇部に窯詰め痕か。	SM9	2層	
27	青銅製品	器種不明	-	-	-	-	-	貼付するタイプの青銅製品か。内面縁以外はずがいに窪み形をしている。	SM9	3層	



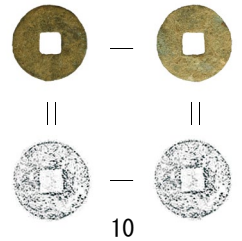


SE1

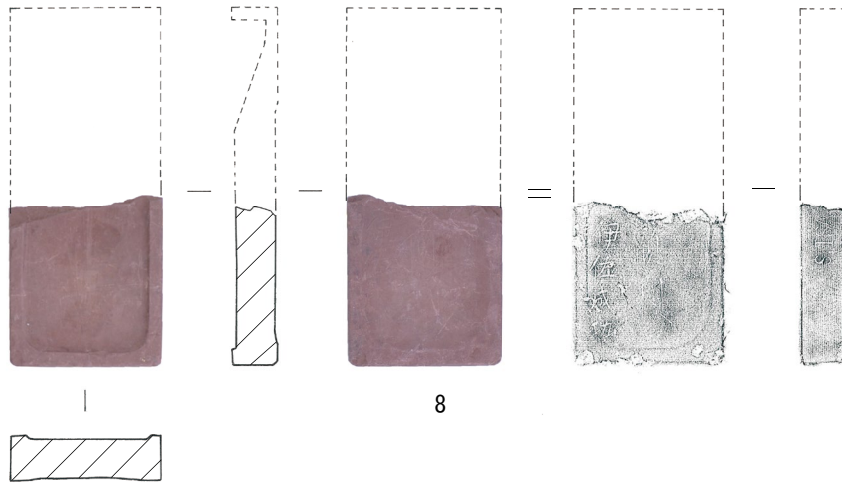
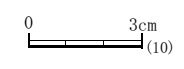
第13図 近・現代の遺構出土遺物 1



9



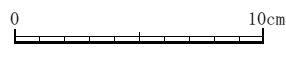
10



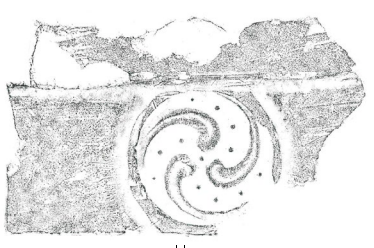
11



12

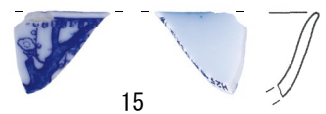


SE1

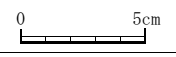


14

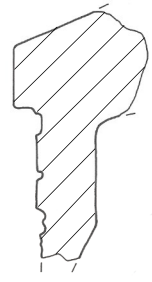
SR12 1層



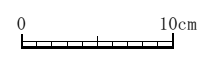
15



SG2

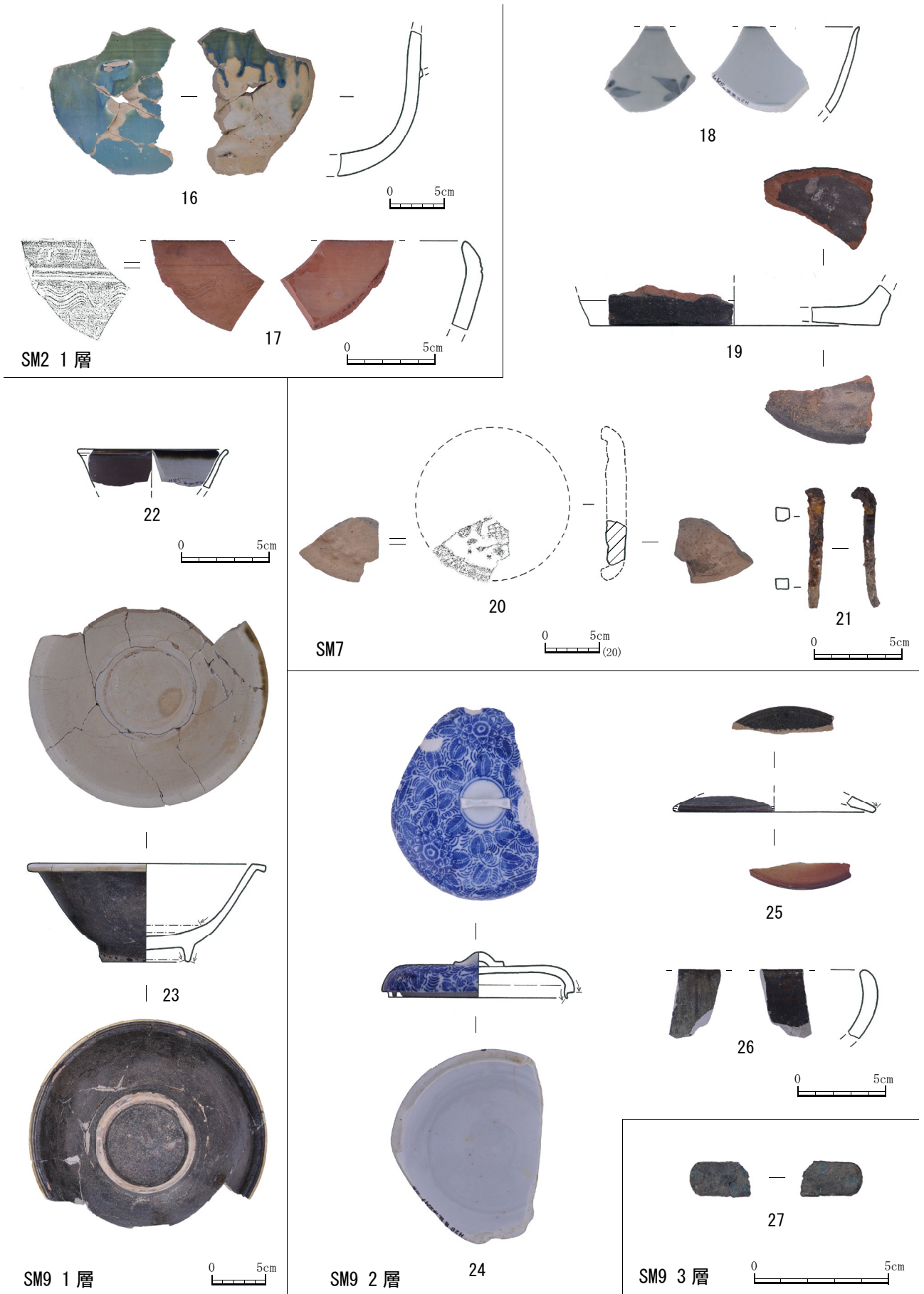


13



第14図 近・現代の遺構出土遺物2





第15図 近・現代の遺構出土遺物3